

---

# 女帝様はラブダーリン

ドラキュラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女帝様はラブダーリン

### 【Nコード】

N0797C

### 【作者名】

ドラキュラ

### 【あらすじ】

妖狐の里を治める女帝、月黄泉は誰から見ても愛夫家である。今日も一分一秒でも早く愛しい夫に甘える為に政務を片付けている。

## プロローグ：ラブラブな朝（前書き）

これは天魔恋物語と別サイトで書いている悪魔な男爵に出て来る飛天夜叉王丸を主人公にしていますので御了承を下さい。

## プロローグ：ラブラブな朝

一番鶏が鳴くと同時に朝日が世界を照らし出した。

それは人界だけではなく天界、魔界、妖しの世界でも同じ事である。

ここ物語の舞台でもある妖狐の里でも朝日が辺りを照らし出し里を治める女帝である月黄泉の住む居城の寝室にも朝日の光が差し込んでいた。

障子から差し出す光が寝室で眠っていた月黄泉の頬を照らした。

「……………んっ」光が眩しいのか横に寝返りを打つ月黄泉の肩まで伸びた灰銀の髪が揺れた。

「……………ひーてん」月黄泉は横で眠る愛して止まない夫の名を呼びながら寝返りを打った。

「……………んー」横で眠っていた男は抱きついてきた月黄泉から逃げるように更に横に寝返りを打つ。

しかし、一足遅く月黄泉に捕まってしまった。

「ひーてん」月黄泉は男に抱きついて広い背に頬擦りをした。

その姿は大好きな飼い主に甘える子犬に見えた。

周囲から見た月黄泉の姿は毎日、威厳と厳格の気に満ち溢れ王に相應しい姿。

しかし、それと同時に近づき難い雰囲気が高慢な性格が仇となり嫁の貰い手も無く家臣一同も困り果てていた。

だが、結婚をしてからは昔の面影が嘘のように消えて無くなった。

これには家臣一同は大いに喜び祝福した。

しかし、夫である地獄帝国男爵、飛天夜叉王丸は結婚という人生の墓場に頭を悩ませていた。

これから描くのは束縛を嫌い自由を愛する夫とその妻であり甘えん坊な女帝のラブラブな日常生活である。

## プロローグ：ラブラブな朝（後書き）

この別バージョンを読みたい人は作者に連絡を！！

## 第一話：公務と私情の狭間で（前書き）

この物語の主人公の月黄泉じゃ。

内容は前に愚

かな作者が書いたはずじゃが、この話は悪魔な男爵の別バージョン  
なのを覚えて置け。

まあ、飛天と二人だけの物語に出れるな  
ど嬉しい限りじゃがな………話は逸れたが思う存分に物

語を堪能してくれ。

## 第一話：公務と私情の狭間で

「……………月黄泉様、お目覚めですか？」寝室で寝ている夜叉王丸に甘えていると襖越ひすましから女中の声が聞こえてきおった。

もう起床の時刻か？まだ妾は飛天に甘えたいから無視じゃな。

女中の声を無視して飛天の大きな背中に頬擦りを続けるが再度、女中の声が聞こえてきた。

「……………月黄泉、起きてるなら返事くらいしてやれ。女中が可哀想だ」それまで眠っていたと思つてた飛天から声が出た。むっ、妻である妾より女中の肩を持つのか。

「月黄泉なら起きてるから連れて行きな」飛天は女中を寝室に招き入れた。

「毎朝、お手数をお掛けします。夜叉王丸様」女中は飛天に頭を下げれと飛天から妾を引き離れた。

離せっ、妾はまだ飛天と一緒に居たいのじゃ！？

女中に腕を掴まれ連行される妾を飛天は助けずに笑いながら手を振っていた。

こらっ、愛する妻である妾を助けずに手を振るとは何事じゃ！！

怨めしそくに睨む妾を飛天は気にせず再び布団を被り眠り始めた。

おのれ！妾を助けずに二度寝するとは！？

仕返しに狐火を放ったが飛天の直前で消滅した。

くうー！風の結界を張りおったなつ。

「月黄泉様、いい加減にしないと“飛天様”に嫌われますよ」妾の腕を掴みながら連行する女中はため息を吐いた。

「月黄泉様は“飛天様”の妻であると同時に妖狐の里の女帝でもあるのをお忘れにならないように」女中の言葉は正論じゃった。

妾は飛天の妻でもあるが同時に妖狐の里を治める女帝でもある。

だから毎日、飛天にべつたり甘えてばかりで公務を疎かにする訳にはいかないのは分かっているが、

妾が公務をしている間に奥女中達が飛天を誘惑するからいけないのじゃ！？

確かに飛天は格好よくて優しく文武道で更に家事全般も出来るから女中達が騒ぐのも無理はない。

しかし飛天は女帝である妾の夫なのじゃ！

他の誰にも飛天を渡す気はないっ。

女帝の地位が欲しければくれてやる。

だが、飛天だけは誰にも渡さない。

そう新たに決意した。

決意を固めたからには早く公務を片付けて飛天を独占しなければ！？

待っておれよ。飛天、すぐに女中達の魔の手から救ってやるからな  
！？

妾が新たに決意を固めているのを知らずに飛天は二度寝を繰り返して  
いた。

## 第一話：公務と私情の狭間で（後書き）

どうじゃったかな？妾の気高く一途な愛情は？      なに？一方的  
じゃと？！ そのような事を言うなら第二話で、改めて妾の飛天に  
対する愛情の深さを思い知れ！！

## 第二話：朝食前に一暴れ（前書き）

この物語の飛天夜叉王丸男爵だ。

いやー、こん

な人生破綻者の俺が小説に出て良いのか正直、迷ったぜ。

まあ、始まった以上は流れに身を任すが、面白くなるように努力するぜ！？

## 第二話：朝食前に一暴れ

「…………ZZZZZZ」皆が朝食を済ませ働き始めている中、月黄泉の夫である夜叉王丸だけは今だに床から起きなかった。

時は午前十時と完璧に朝寝坊だ。

普通なら女中の誰かが夜叉王丸を起こしに来るのにまだ誰一人として部屋を訪れていなかった。

そのせい（お陰？）で夜叉王丸は今だに夢の世界の真っ只中なのだ。

どんな夢を見ているのか夜叉王丸は終始、笑顔を絶やしていない。

何故、夜叉王丸を誰も起こしに来ないのかと言うと月黄泉が女中達にあれこれと仕事の山を押し付けているからだ。

理不尽と言えるくらいの横暴にも女中達は我慢しながら自分が夜叉王丸を起こしに行くのだと決意しながら仕事を片付けていた。

女中達に仕事を押し付けている月黄泉も自分が愛しい夫を目覚めさせる必死に仕事を片付けている。

しかし、そんな努力も虚しく夜叉王丸は自分から目を覚ました。

「…………ふぁーあーよく寝たな」黒い寝巻をだらしなく着くずしながら夜叉王丸はノロノロと立ち上がった。

「さてと城の奴らは仕事の最中だから城下に下りて飯でも食うかな

？」不精髭の生えた顎に手を当てながら夜叉王丸は呟いた。

「そうと決めれば行動あるのみだ」寝巻を脱ぎ捨てると青い陣場織りに黒の袴を履いて腰には大小の太刀を差して準備を終えた。

「さあて、どんな城下か楽しみだぜ」

愉快的笑みを浮かべながら夜叉王丸は三の丸の窓から飛び降りた。

「……これで、終わりじゃ」最後の書類に判を押してやっ  
と仕事を終えた。

「ふー！」朝から執務室に山積みになされた書類の山と格闘する事、  
四時間……長い道のりじゃった。

なに？あれだけの書類の山を四時間で片付ける方が凄いな？

ふふふふふ、愛の成せる力じゃ……

仕事も片付けたし心置きなく飛天を起こしに行ける。

襖を開け部屋から出ようとしたり外にはこれまた信じられない位の  
書類の山が行く手を阻んでいた。

「……あまりの量に妾は唾然とするしかなかった。

こ、こんなに片付けられる訳がないっ！？」

明らかに女中達が妾の邪魔をしようとしているのは明白じゃった。

おのれー、そうまでして妾を飛天の元に行かせない気なら……

受けてやる！

必ず書類の山を片付け飛天を起こしに行つてやる！

そうと決まれば行動あるのみじゃ！？

目の前にそびえ立つ書類の山に妾は戦いを挑む。

待つておれよ。飛天。必ずお主を起こしに行くからな！？

一方、そんな事をまったく知らない夜叉王丸は城下の中を散策している最中だった。

「昔の日本の面影があつて良い場所だな」

江戸時代の風景や市場を見て夜叉王丸は満足な笑みを浮かべていた。

「飯屋は………おつ見つけた」辺りを見回し手頃な店を見つけると漆黒の長髪を風に撫でさせながら店の中に入った。

「いらつしゃい！」のれんを潜ると元気な少女の声が夜叉王丸を出迎えた。

「飯を頼む」近くにあつた席に座り娘に注文をする。

「畏まりました。少々お待ち下さい！」盆を持ちながら頭を下げる

と店の奥に消えた。

娘が立ち去った後に夜叉王丸は懐から通常の倍はある銀の煙管を取り出した。

火を点け煙管を美味そうに吸った。

「お待たせしました」しばらくして盆に鯖さばの味噌に白菜汁、白米、少量の漬物が出された。

「おお、美味そうだ」煙管を横にある箱に置き箸を掴み頂こうとした瞬間に

「ぎゃあ!？」のれんを超えて男が夜叉王丸の座っていた机に直撃し料理が宙に舞った。

地面に落ちた料理は見るも無残な形で目の前に出された。

「どけよ!大旦那と若旦那のお出ました!？」のれんを超えて悪人面した二人の妖狐の男が店の中に入って来た。

「娘さん。女将はどこかな?結婚の返事を聞きたいのだが……  
……」大旦那と呼ばれた男が気丈にも睨む娘を見下ろした。

「……母は、買い出しで留守です。返事も私も母も変わりません」

「何時まで強情なんだい?お葛ちゃん。  
ま、そんな強情な所が私も父も好きなんだけどね」若旦那の声が耳に触れた。

『……気色悪い奴』心の中で嘔吐の真似をする夜叉王丸。

「しかし、こつも強情な態度ばかりは頂けないから少し、お仕置きをするしかないかな？」若旦那が指を鳴らすとチンピラ達が店の中で暴れ始めた。

「や、止めて下さいっ」客は夜叉王丸しか居ないから怪我はないが店内は、無茶苦茶にされている。

必死に制止を呼び掛ける少女を二人はニヤニヤと笑いながら見ていた。

『少々、目に余るな』しばらく黙って見ていたがあまりの横暴に夜叉王丸は腰を上げた。

「……」机を投げようとした男に膝がつくんをした。

「うおっ！」男は床に膝を着き、間を置かず投げようとした机の下敷きになった。

「お前ら少し、おいたが過ぎるぞ」長煙管を口に挟みながら夜叉王丸は娘を自分の背中に隠した。「お侍さん、下手な正義感身身を滅ぼしますよ」大旦那は夜叉王丸を見ながら脅し文句を言った。

「生憎と正義感なんて持ってない」左から右に煙管を持ち変えながら答える。

「……ほう。するつと、何か見返りを望むのですか？」

「……まあ、食い損ねた飯を、もう一度つくり直してもらいた  
いかな？」

「たかが、そのような理由だけで私共に喧嘩を売るのでか……  
……？」夜叉王丸の言葉に啞然とする一同。

「まだ理由が欲しいなら、お前らみたいな奴らを見てると、頭に来  
るから成敗する」煙管を弄びながら答える。

「……面白い。ならばお相手しましょう」大旦那は眉間を抑  
えながら外に出た。

「ここで待つてな」後ろで震える娘の頭を撫でながら夜叉王丸も外  
に出て行く。

「……先には言いますが、後悔しますよ」夜叉王丸を見ながら  
最後通告だと言った。

「そういう事は、俺を負かしてから言え」煙管に再び火を点けなが  
ら返答する。

「……やれ」大旦那の命令にチンピラ達は短刀を出し襲い掛  
かった。

「……真っ先に突っ込んできた男を交わすと背中に蹴り  
を入れそのまま走った。

二人目は煙管で頭を殴り三人目は上段回し蹴りで転倒させた。

突然、はじまった喧嘩に市場にいた者は驚いたが、すぐに野次馬となった。

「くそつたれが！」チンピラ達は、夜叉王丸と距離を取り、狐火で攻撃をはじめた。

「骨も残さず焼き殺してやる！」チンピラ達が一斉に、狐火を放った。

「ほおう。そつちがそうなら俺も炎を使うかな」無邪気な笑みを浮かべ、気を念じて地面から黒い炎の龍を召喚した。

「あいつらを黒焦げにしてやれ」チンピラ達に指を差す。

狐火を一口で食べると龍は真つすぐにチンピラ達に襲い掛かった。

「う、うわぁー!？」チンピラ達は一目散に背を向けたが全員、仲良く空に舞い上がった。

「もう少し骨のあるチンピラを雇いな」煙管に火を点けながら言った。

「・・・そうですね。では次に会うまでは用意しておきます」大旦那は面白そうに笑いながら若旦那を連れて帰って行った。

「大丈夫か？嬢ちゃん」夜叉王丸は娘を案じた。

「は、はいっ」先程の様子を見ていた娘は夜叉王丸に怯えたが、すぐに治った。

「あ、ありがとうございます……」娘は頭を下げ礼の言葉を呟いた。

「さっきも言った通り、飯を食いたいから、助けたただけだ」くわえた煙管を口から離し白煙を吐いた。

「じゃあ、すぐに作り直すので待ってて下さいっ」なぜか赤面しながら娘は店に戻った。

「これで、やっと飯が食える」夜叉王丸は安堵の笑みを浮かべた。

その笑みは、背格好に似合わない輝かしい笑顔で野次馬達は暫し魅了された。

一方、そんな城下での夜叉王丸の活躍を知る由もない月黄泉は、ひたすら書類の山と格闘していた。

## 第二話：朝食前に一暴れ（後書き）

俺の活躍はどうだった？正直、腹が減ってたから、ちいーと手加減  
できなかつたが・・・・・・  
まあ、それは置いていて三  
話を楽しみにしていてくれ！！

### 第三話・誰にも渡さない(前書き)

三話を更新じゃ。今回は妾が、どのくらい飛天を想っているのか分かるぞ(笑)では、存分に楽しめ!

### 第三話：誰にも渡さない

ゴロツキを退治した夜叉王丸は約束通り、飯を作り直してもらい食べていた。

「はー、美味かった」食事を終えた夜叉王丸は、一服した。

「本当にお礼は、いいんですか？」娘、お葛は一服している夜叉王丸に尋ねた。

「ん？別に金に困ってないから」そりゃ、妖狐の里を治めていれば金には、困らないだろう。

「は、はぁ……」夜叉王丸の態度に、お葛は戸惑った。

「ふうー、腹も満足したし行くかな」煙管を、くわえたまま、テールに金を置いて立ち上がる。

「あ、あの！母が、母が帰って来るまで待ってもらえませんか？」去ろうとする夜叉王丸を呼び止める。

「いや、そろそろ帰らないと、やばくてな」時刻は、正午を少し過ぎたが、前に無断外出をして月黄泉が大騒ぎした事があるので帰ろうとする。

「まあ、近い内に飯を食いに、また来ると思うぜ」お葛の頭を優しく一撫でして店を後にした。

「……」夜叉王丸が立ち去った後、お葛は、胸の騒ぎ

がと上気した頬に、しばらく戸惑った。

一方、城では……………

「……………ふ、ふふふふふ。や、やっと、終わった」あの大量にあった、書類の山を、全て片付けた月黄泉。

その姿は、締め切り日にギリギリ間に合った漫画家のようだ。

「……………今、起こしに行くぞよ。飛天」ふらつく足に力を込めて寝室に迎う月黄泉。

これで寝室が、もぬけの殻だと知ったらどうなるのだろうか？

「……………はあ、はあ、はあ、はあ、や、やっと着いた」やっとの思いで、寝室に辿り着く妾。

いつもなら大した距離でもない道が、険しい山道に感じた。

やはり、無理をして一気に片付けたのが、効いたのか？

だが、飛天を起こせるのなら、この位……………

襖を一枚、挟んで寝室がある。

この襖を越えれば、愛しい飛天に会える。

に手を掛けるが、途中で力が抜け始めた。

そ、そんな、もう目の前なのに……………

後、一歩なのに……………

後、一歩で力尽きてしまうなんて……………

ひ、飛天……………ぱたり

床に倒れた妾は夢の中に旅立ってしまった。

一方、そんな哀れな月黄泉を、知らない夜叉王丸は、揚々と城下から、帰ってきた。

「まだ、外れてないようだな」安堵の溜め息を吐きながら城の中に入る。

「…………お帰りなさいませ。夜叉王丸様」城の中に入ると女中と出会った。

この女中には、何かと世話になっている。

「城下に遊びに行っていたのですか？」

「ああ。誰も起こしに来ないから、勝手に起きて飯を食いに行った」多少、皮肉を込めて返答した。

「そ、それは申し訳ありませんでした」焦る女中に夜叉王丸は笑みを浮かべた。

「今度からは、頼むぜ」女中の肩を叩きながら、自室に迎った。

「そういえば、月黄泉は、どうしたんだ？」この時間なら、仕事を  
終え一休みしているのだが、執務室には居なかった。

「……………ん？」自室に迎いながら、考えていると床に倒れてい  
る月黄泉が、視線に入った。

「おい、どうした？」床に片足を着いて、月黄泉を揺さ振る。

「……………んー」揺さ振れた月黄泉は、眠いとばかりに寝返りを  
打った。

「こんな所で寝たら、風邪を引くぞ」再度、強く揺さ振るが月黄泉  
は起きる気配がない。

「はあ、仕方ないな」溜め息を吐きながら、十二単衣を着ている月  
黄泉を軽々と抱き上げた。

自室の襖を片足で開けて中に入ると、傍にあつた座布団を枕にして  
月黄泉を寝かした。

「……………んっ」寝返りを打つと裾の間から、白い雪のような  
肌が見えた。

普通の男なら生唾を飲むのだが、夜叉王丸は、気にせずに陣場織り  
を月黄泉に掛け部屋を出た。

「風呂にでも入るか」自室を出て上半身、裸のまま風呂場に向かっ

た。

『飛天、起きろ』布団で心地よい寝息を、たてながら眠る飛天を優しく揺らす。

『んー、も、もう少し……』寝たりないと飛天は毛布を引っ張る。

『ダメじゃ。皆、もう起きている』頭まで被った毛布を強引に引き離す。

『うー、まだ寝たかったのに……』文句を言いながら、妾の頬に手を伸ばした。

『……』半分、寝呆けた状態で妾の唇を塞いだ。

毎朝、人知れず行われる口付け。

妾に口付けをして飛天は、覚醒する。

飛天の口付けは、毎朝、甘くて優しさに溢れていた。

一度、唇を離れたが再び塞がれ布団に押し倒された。

『……』飛天、朝じゃぞ』言葉とは、裏腹に心では期待していた。

『朝食の前に、お前を食べる』貪るように妾を求める飛天。

朝から淡い官能の一時が……

「……………ん？」唐突に妾は目を覚ました。

「せっかく良い所じゃったのに……………」愚痴を零しながら、妾は思い出した。

「そうじゃ！飛天を起こしに行った途中で、力尽きてしまったんじやった！」急いで立ち上がる。

「ん？」辺りを見回して寝室では、ない場所だと気が付いた。

「ここは、飛天の部屋ではないか」滝を描いた掛け軸、質素な木の机、このように質素な部屋は飛天以外に考えられない。

そして何より、煙草の臭いがプンプンする。

初めは、嫌な臭いだったが何時の間にか、大好きな臭いに変わっていた。

恐らく、飛天が起きて妾を自分の部屋に、寝かしたのであろう。

身体に掛けられていた、陣場織りを強く抱き締める。

くうー、飛天の臭いがして気持ち良い……………

ん？

くんくんくん

微かに、臭う女の臭い。

まさか、妾の他に、女を囲うつもりか？！

陣場織りを掴むと妾は、部屋を飛び出した。

許さんぞ、飛天は妾だけの男。

誰にも渡さない。

他の女子に渡す位なら、無理心中をするまでじゃ。

あ奴は、妾の愛しくて止まない夫なのじゃからな。

手当たり次第に部屋という部屋を捜し回った。

城の者たちは、訝しんでいたが、気にしている余裕など無い。

くそっ！何処におる？

中々、見つからないので、苛立ち始めた。

「くそっ！何処におるんじゃ。飛天！？」つい怒鳴り声を出してしまった。

「呼んだか？」後ろを振り返れば、湯上がりの飛天が立っていた。

い、いきなり背後に立でない！

しかも濡れた髪に色気があるぞっ。

「なんだ？俺を探してたんじゃないのか？」飛天の色気に、酔っている頭上から声が聞こえた。

「そ、そうじゃ！お、お主の羽織りから、女子の臭いがしたぞ！？」  
噛み付くように、問い詰める。

「……………ああ。さっき女中と話してたからな」しれっと答える。

「本当か？」まだ信用できんな。

「まあ信じないなら、それでも良い」傷ついたように肩を竦めると横を通り過ぎる。

「ま、待て！誰も信じないなど言っておらん！」着物の裾を掴みながら叫ぶ。

「……………わ、妾にとって、主は愛して止まない男なのじゃ。  
だ、だから、他の女子に取られるのでは、ないかと心配だったのじや」頬が熱くなるのが分かった。

「ん？そんな心配しなくても大丈夫だ」ポンスと優しく頭に手を置かれた。

「お前の事は“玉藻”から頼まれてるからな」むっ、また母上の名を出しおつたな。

玉藻……………妾の母にして、妖狐の里の創設者で九尾の狐。

飛天を母上に紹介しに行った時に恋仲だったと初めて知った。

二人の出会いは、飛天が人間だった頃に、人間界で傷を負った母上の看病をしている内に恋が芽生えたようだ。

今でも、女の美しさを誇る母上は稀に、飛天に会いに来る。

現在、母上は、那須で大御所として色々と力になってくれている。

何度か那須に行ったが、妾が留守の間に、二人が夜伽をしていたのを知ってからは、足を運んでいない。

「まあ、玉藻は玉藻。お前はお前だ。気に病む事じゃねえよ」頭に置いた手で優しく撫でられた。

母上に対する劣等感の気持ち顔に出たか？

「じゃあ、俺は飯前に一眠りするから」妾から羽織りを奪つと自室に戻って行った。

結局、上手く交わされた気がして仕方がない。

……まあ良い。何れは、問い詰めてやる。

お主は、他の誰の物でも、母上の物でもない。

お主は、お主の身体も、魂も、全て、この月黄泉の物なのじゃから  
な……

誰にも渡さない。

絶対に・・・・・・・・

拳を握り締めながら決意を新たにした。

第三話・誰にも渡さない(後書き)

はあー、あの馬鹿、また暴走しやがって……

まあ、想いは本物だから良いかな？

四話は、俺の活躍に期待してくれ。

第四話：名を変え身分を変えて（前書き）

更新が遅れて申し訳ない。夜叉王丸事、時雨空牙だ。今回は、俺が城から抜け出す物語だ。最後まで読んでくれ！？

#### 第四話：名を変え身分を変えて

「ふんふんふん」鼻歌を歌いながら、月黄泉の夫であり、妖狐の里の主上（しゅじょう、おかみ）である夜叉王丸は城下に降り立った。

「いやー、一週間振りに外出許可が降りたから気分爽快だぜ」晴れ晴れと照り上がる道を歩きながら笑う。

飯屋の件から夜叉王丸は一週間の外出禁止を言い渡された。

ただ着物に女物の香りがただけで外出禁止とは、横暴だと非難されたが月黄泉は気にしなかった。

更に夜叉王丸が逃げないように執務室に縛り付けていた。

その気になれば力ずくで行動も出来たが、月黄泉の気持ちも考え思いつ止まった。

そんな夜叉王丸に同情した女中や臣下達が月黄泉に圧力を掛け一週間で外出許可を勝ち取ったのだ。

下に恐ろしきは、民衆の力なりかな。

「城の奴らに感謝しないとな」煙管を蒸かしながら夜叉王丸は悠々と飯屋に向かった。

「・・・邪魔するぜ」暖簾を潜り店の中に入る。

「いらつしやいませ！」一週間振りに聞く元気なお葛の声が耳に入った。

「あ、貴方様は……」客が夜叉王丸と分かり頬を染めるお葛。

「よお、俺の事を憶えていたのか？嬢ちゃん」煙管を口から離し微笑する夜叉王丸。

「あ、当たり前ですっ」赤面しながら怒った。

「はははは。悪りい悪りい悪りい」ぼんぼんと優しく頭を叩く夜叉王丸。

「今日は客が一杯だな」店内を見回すと職人やら侍やらで溢れていた。

「こりゃ、無理か」諦めて背を向けようとした。

「あ、あのーに、二階が空いているので、二階で待っていて下さい」

「いや、そんな気遣いは……」丁寧に断ろうとしたが

「どうぞ二階へ……」お葛の、ど迫力とも言える気に圧倒される夜叉王丸。

「じ、じゃあ、お言葉に甘えて二階に行こうかな」お葛に案内されるがまま二階に通じる階段を登る夜叉王丸。

「こ、こちらですっ」案内された二階は町を一望できるように造られていて心地よい感じがした。

「料理は前と同じ品を頼むよ」座布団に腰を降ろしながら注文を頼んだ。

「……ふうー」お葛が下に降りたのを確認すると溜まった息を吐いた。

「……良い眺めだ」城から見る光景よりも馴染みを感じた。

暫らく時を忘れて夜叉王丸は、城下を見た。

「……ん？」雷鳴と豪雨の音で夜叉王丸は目覚めた。

『何時の間にか眠っていたのか？』肩ごしに毛布が掛けられていた。

「あつ、起きたんですか？お客さま」料理を盆に乗せたお葛が入ってきた。

「これは嬢ちゃんが？」毛布を肩から取る。

「は、はい。風邪を引かないように」緊張した口調だった。

「ありがとよ。お陰で気持ち良く眠れた」微笑みながら畳んだ毛布を渡す。

「鳴神がひどいですね」窓から見える豪雨と雷は一行に止みそうに

なかった。

「こりゃ、ずぶ濡れで帰るしかないか」溜め息を吐きながら畳に置いた刀を立ちながら腰に差す。

「えっ、この雨の中を帰るんですか？」お葛は驚きを隠せない様子だった。

「ああ。別に濡れるのが嫌な訳じゃないからな」

「で、でも、雷も近いですし……」途中から口籠もった。

「また来るよ」お葛は、笑顔で通り過ぎる夜叉王丸を止める方法を知らない。

「さあて、ずぶ濡れで帰るか」

店を出て夜叉王丸は走りながら城に向かった。

「……」執務室で政務をしていた月黄泉は、苛立ちを隠せないように眉間に皺を寄せ不機嫌なオーラを出していた。

『……飛天はまだ帰らんのか?!』夕刻を過ぎても帰らない

夫に月黄泉は苛立ちを募らせた。

「……………月黄泉様、この豪雨と鳴神では夜叉王丸様も立往生して  
いますよ」玉露を出しながら女中は女主人を宥めた。

「……………」ぶすつとした表情で湯呑みを口に運んだ。

「あちちちち！！」冷まさないで飲んだ為、舌を火傷した。

勢い余って持っていた湯呑みを手放してしまった。

床に落ち無残な形になるはずだった湯呑み。

「おっと」横から出た手が湯呑みをキャッチした。

「……………ひ、ふいつん（ひ、飛天）」火傷した舌で上手く言  
葉を発せない月黄泉。

「いま帰ったぜ」全身ずぶ濡れ状態でニヤリと笑う夜叉王丸。

「まあ、そんなにお濡れになって！！」女中は信じられないような  
視線で夜叉王丸を見た。

「直ぐに湯の準備を」一礼して女中は部屋を出て行った。

「俺も部屋に戻るか」窓から去ろうとした所を月黄泉の裾を掴んで  
止めた。

「湯の前にする事があるのではないか？飛天」まだ熱い舌を我慢し

ながら凄味のある目付きで夫を見上げる月黄泉。

「ん？何かあつたけ？」とぼける夜叉王丸。

「……また、外出禁止にするぞ」脅し文句を出す月黄泉に夜叉王丸は、ため息を吐いた。

「……今、帰ったぞ。我が妻よ」ため息を吐きながら、紅が塗つてある月黄泉の唇に己が唇を重ね合わせた。

「……んっ」心底、幸せそうな笑みを洩らす月黄泉。

「……これで良いだろ？」唇を離しながら威圧的な眼差しで月黄泉を見下ろす。

「まだ足りないが、それは夜まで取っておこうぞ」悪戯っぽい笑みを浮かべる月黄泉。

「……」この時点で夜の外出を決めた夜叉王丸だった。

夕食を済ませた月黄泉は白い寝巻姿で寝室に敷かれた布団の上に正座で夜叉王丸が来るのを待っていた。

尻に生えた五つの尻尾は嬉しそうに動いていた。

『まだか？飛天。早く来て妾を抱いてたもれ』焦れつつく待ちっ

たが、何時まで経っても夜叉王丸は来なかった。

『……遅い。何をしているのじゃ？』苛々と扇を叩きながら、それでも辛抱強く待っていたが

二時間後、ついに我慢の限界に達した。

「もう！待てぬ！！」扇が悲鳴を上げる位、握り締め寢室を飛び出した。

『今夜は寝かさんぞ！』意気込んで風呂場の扉を開けたが、中には誰もいなかった。

「ぬっ、妻の気配を察したのか？」微かだが夜叉王丸の臭いを感じ数刻までは居たのは分かった。

「何処に行った？飛天」近くの女中を捕まえ尋ねたが知らないと言われた。

その後も何人かの女中や臣下に尋ねたが誰も知らないの一点張り。

『ご奴ら、飛天の居場所を知りながら喋らないな』

月黄泉は、気弱そうな女中を捕まえ半ば脅しで口を割らせた。

予想は見事に的中、夜叉王丸は城下に逃げたと判明した。

「逃がさんぞ！！」勇んで城下に向かおうとしたが、何処からともなく現われた女中達に抑えられた。

「夜叉王丸様のお頼みですので、お許し下さい」憎らしい笑みを浮かべながら女中達は、主人を連行した。

「おのれー！必ず連れ戻しに行くからなー！！」じたばたと暴れながら月黄泉は絶叫した。

「……ん？」雨が降る中を傘を差して城下に続く道を歩いていた夜叉王丸は後ろを振り向いた。

「何か聞こえたような……」耳を澄ませたが、何も聞こえなかった。

「気のせいか？」首を傾げながら歩を進める。

「さてと、暫らくは宿でも借りて独身貴族に戻るかな？」愉快そうに笑いながら時雨の中を歩く夜叉王丸。

一方、城では夫を連れ戻そうと暴れる月黄泉と、それを必死に抑える臣下達の戦いが始まっていた。

そんな自分を賭けた戦いが起きているのを当の夜叉王丸は知る由もない。

「……ん」雨の中を歩いていると大きな木の下で雨宿りしている一人の女性がいた。

「雨宿りか？お嬢さん」ゆっくりと歩みながら尋ねる夜叉王丸。

「あっ、はい」女性は夜叉王丸の格好から武士と判断し会釈した。

「隣町まで行った帰りに急に振り出して傘を用意していなかったのです」微苦笑しながら答えた。

「家まで送ろうか？」夜叉王丸の申し立てに女は躊躇した。

「お武家様の手を煩わせる訳には……………」

「お嬢さんを危険から遠ざけられるなら喜んで煩らうよ」「この場に月黄泉がいたら

『妾にも、それ位、甘い言葉を掛ける！？』と言う位のセリフだ。

大抵の女なら無条件降伏をするだろう。

案の定、女も赤面しながら

「……………では、送ってくれませんか？」と無条件降伏をした。

女性を傘に招き入れ、自分は肩方だけ入った。

「では、行きましょう」時雨の中を夜叉王丸と女性は歩み始めた。

「……では、私共は失礼します」妾を拘束した女中達は一礼して執務室から退室した。

城の主人である妾を監禁するとは、どっとう臣下達じゃ!?

悪いのは、飛天の方ではないか!

……妻である妾から、逃げたりするからいけないのじゃ。

こんなに主を愛しているのに……

待っておれよ。必ず主の元に妾は行くからな。

主が嫌な顔をしようと、拒絶しようと、妾は主の元に行くからな。

……  
……  
……と決めれば、ここから抜け出す作戦を練らねばのう……

「まあ、お武家様は魔界の方でしたの」雨の中を夜叉王丸と女性は、楽しそうに談笑しながら歩いていた。

「魔界より妖狐の里の方が落ち着くんで引越して来たんだ」嘘八百を言う夜叉王丸の言葉を信じる女性。

魔界にいた時より悪魔になった気がするのは作者だけだろうか?

「あつ、着きました」話している内に女性の家に着いたようだ。

「……ここは」女性が家と言った場所は昼前に来た飯屋だった。

「お葛、ただいま」暖簾が外された扉を開けながら女性は中に入つて行つた。

「あつ、姉さん。お帰りなさい」テーブルを拭いていた、お葛は女性に笑い掛けた。

「この、お武家様が雨宿りしている所を助けてくれたのよ」店の中に夜叉王丸を招き入れる。

「あ！お侍さんじゃないですか！？」夜叉王丸を指差しながら叫ぶお葛。

「えっ？じゃあ、この方が例のお侍さん？」夜叉王丸を凝視する女性。

「うん。私と店を守ってくれた侍さんだよ」女性に微笑かける、お葛。

「まあ、妹と店を守ってくれた方とは知らずに、ご無礼を……」  
「……」女性は、お葛を伴い頭を下げた。

「いや、別に大した事はしてないから」困惑した口調で返答する夜叉王丸。

「お侍さんはこんな雨の中をどうしたんですか？」頭を上げたお葛が尋ねた。

「まあ、色々と事情があつて宿を探してたんだ」他人に言えたような内容ではない為、苦笑した。

「まあ、宿をお探しなら二階を使って下さつて結構ですよ」嬉しい申し立てだった。

「いや、うら若き娘が二人だけの家に、俺みたいな浪人が泊まる訳には……………」言葉を濁す。

「お武家様のような心優しい方なら心配いりませんわ」あっさり返答する女性。

「いや……………」返答に困る夜叉王丸。

「今頃、どの宿も閉まっていますよ」お葛が追い打ちを掛けた。

時刻は夜の十一時と言つた所で、どの宿も閉まっているか閉めようとしている所だろう。

『……………まあ、月黄泉に見つからなければ大丈夫だよな？』暫し思考して答えを出した。

「じゃあ、お言葉に甘えて厄介になろうかな」夜叉王丸は苦笑しながら言つた。

「では、布団を敷いて来るので少々まって下さい」女性は一礼すると嬉々と二階を登って行った。

「そう言えば、まだ名前を言ってなかったね」ポンと手を叩く。

「俺の名は時雨空牙。見ての通り貧乏浪人だよ」嘘ばかりを並べる夜叉王丸。

本当は魔界の貴族で更に妖狐の里の王のくせに……………

「わ、私は、お葛と言います」慌てて自分も名乗り頭を下げる。

「お武家様、布団の準備が出来ました」二階から女性の声がした。

「おお。じゃあな。お葛ちゃん」お葛の頭を優しく一撫でして二階に通じる階段を登って行く。

「茶漬けを持って来ますね」部屋に入ると女性が出る所だった。

「いえ、泊めて貰うだけで結構ですよ」やんわりと断る。

「では、お酒でも……………」

「気遣いは嬉しいですが酒も結構です」

「左様ですか？では、お休みなさいませ」不服そうな口調だったが一礼して部屋を出た。

しかし、直ぐに戻って来て

「申し遅れましたが、私の名前は水藻と申します。時雨空牙様」自分の名前を名乗り終えると襖を閉めた。

「・・・背中に感じた寒気は気のせいか？」月黄泉とは違う危機感を本能的に夜叉王丸は悟った。

『不味いかな？』嫌な予感を感じながら夜叉王丸は床に着いた。

この予感は、後々とんでもない結果になるのを夜叉王丸は知る由もない。

第四話・名を変え身分を変えて（後書き）

……なああああにいいいいが！時雨空牙じゃ！？

妾との甘い甘い夜の営みから逃げおつて！？

おまけに妾は監禁されるし？！

妾は悪くない

のに何故じゃ！！

そんな事より何じゃ？あの

二人の小娘は？！

妾の飛天に色気など使いおつて。

早く城下に降りて飛天を連れ戻さねば！！

第五話・酒場の用心棒（前書き）

ういーす。夜叉王丸だ。今回は、二人の過去が分かり俺の行動に注目だ。じゃあ、読んでくれ！！

## 第五話：酒場の用心棒

「……………くぁー」まだ明けない時間帯に彼にしては珍しく目を覚ました。

『あー、城から出たんだっけ？』辺りを見回しながら夜叉王丸は思い出した。

「顔を洗いに行くか」気怠そうに身体を動かし階段を降りた。

店の裏側に小さな小屋と井戸があった。

井戸水で顔を洗う。

「あー、タオル忘れた」顔を洗い終えた後に、拭く物を忘れた事に気付いた。

「これを、どうぞ」背後を振り向くとタオルを持った水藻がいた。

「ああ、これはどうも」軽く会釈してタオルを受け取る。

「朝が速いんですね。空牙様は」

「たまたまです。いつもは昼過ぎに起きます」苦笑しながら返答する。

「そうなんですか？そうは見えませんか？」気品ある笑みを浮かべた。

『……この娘、元は由緒ある家の出だな』夜叉王丸は、眉を潜めたが尋ねなかった。

「すぐに朝食の準備をして来ますね」そんな夜叉王丸に気付かず水藻は、店の中に入った。

「飯が出来るまで城下の様子を見るか？」水藻の後を追うように店に入り二階に続く階段を登った。

「おお、いい眺めだ」朝日を浴び輝く城下町を見下ろしながら夜叉王丸は、煙管を蒸かした。

「たまに、早起きしてみるのも悪くないな」そんな事を思っている夜叉王丸。

一方、こちらは夜叉王丸が不在の城。

「月黄泉様、朝でございます。お目覚め下さい」女中が耳元で起す声が聞こえたが、無視した。

ふんっ。誰が起きるか。

飛天から引き離れた仕返しじゃ！

「月黄泉様、お目覚め下さい」身体を揺さ振られたが無視した。

何があっても、絶対に起きんからなっ。

「……起きろ。月黄泉、朝だぞ」耳元で囁かれた声は忘れる訳がない。

待ち侘びていた声。

飛天の声！！

バツと起き上がり周りを見回す。

声は聞こえたのに飛天の姿はなかった。

これは、どういう事じゃ？

「……………やっぱり狸寝入りでしたか」妾を起こしに来た女中が腕を組んで睨んでいた。

その手にある物は……………

「月黄泉様が愛用していた“飛天様時計”ですわ」妾の視線に気付いた女中は、意地悪な笑みを浮かべた。

お、おのれ……………どこから持ってきたんじゃ？

「“飛天様”の声を録音して更に加工して目覚ましにしてた、なんて“飛天様”の耳に入ったら、どうなりましょうね？」悪女さながらの言葉じゃな。

「さあ、早く起きて仕事を始めて下さい」用件だけ伝えると女中は出て行った。

うううう、飛天……………助けてくれ。

そんな月黄泉の悲痛な叫びも知らない夜叉王丸は

「……頂きます」水藻とお葛の作った朝食を食べようとしていた。

「お味はどうですか？」

「味加減も良くて美味しいですよ」飛び切りの笑顔を向ける夜叉王丸。

「はあー、良かった」ほっと溜め息を洩らす水藻。

「空牙様のお口に合わなかったらどうしようかと思いましたが……  
……」豊満な胸に手を当てる水藻。

その仕草で十人中十人の男が鼻血を出すだろう。

「ご安心ください。こんな美味い飯が気に入らないなんてありません」  
ん

「まあ、空牙様は世辞が上手いですね」赤い頬に手を当てる水藻。

「いや、世辞じゃありませんよ」仲慎ましい夫婦のような光景だ。

「空牙様、ご飯のお代わりはどうです？」横から声がした。

お葛だ。紺色の瞳には、うつすらと炎が揺らめいていた。

「いや、まだ残っているので大丈夫ですよ」

「では、お味噌汁のお味はどうですか？」

「ちょっと、お葛、空牙様を急かさないの」水藻が嗜める。

「ちょうど味噌汁を頂こうとした所ですから」目で大丈夫と言う夜叉王丸。

「……んー美味しい」優しく、お葛の頭を一撫でする。

それは、歳の離れた妹や娘にする仕草だった。

「……ありがとうございます」気難しい表情だった。

「……かわや廁に行つてきます」席を立ち外に出て行った、お葛に苦笑する水藻。

「いつの間にか年頃の娘になっていたのね」

「まるで年頃の娘を持つ父親の発言ですね」笑みを洩らす。

「……私が父と母の代わりなんです」表情に影が差した。

「父と母は、先の戦で亡くなってしまつて……」

『……妖獣大戦か』すぐに察する夜叉王丸。

妖狐、妖猫、妖鳥族を始めとする娘達を妖狸一族が、拉致したのが原因で起きた戦。

夜叉王丸の友人で妖王、魍月を先頭に戦つたが、内部からの裏切り

や争いで敗北は必至だった。

それを聞いた夜叉王丸が援軍を連れ形勢は逆転。

この戦で大勢の民間人も犠牲になった。

またこの戦で、夜叉王丸は月黄泉と嫌々ながらに結婚した。

「・・・父は、妖狐の軍の組頭を務めていました」だから言葉使いに品があつたと納得する。

「父が死んで母が女の手で私とお葛を育てて暮れたのですが、数年前に病死してしまって・・・」茶色の瞳から、涙が溢れだした。

「父と母が亡くなってから私とお葛に前々から色目を使っていた呉服屋が、言い寄って来たんです」

『俺が追い払った妖狐の男達か』一週間前に倒した男達を思い出す。

「私もお葛も結婚する気はないのですが、力づくで物にしようとする・・・」

『まるで、時代劇のような話だな』などと不謹慎極まりない事を思った。

『こういう話だと、店に居候して悪者を退治するんだよね・・・』  
・・・何か良からぬ事を考えているようだ。

『よしっ、決めた』何を決めたかというところ

「私がこの店の用心棒を致しましょう」「である。

「……え？」突然の言葉に戸惑う水藻。

「そのような話しを聞いたら放つて置けません」などと大義名分を並べているが本心は……

『一度で良いから、時代劇みたいな展開で用心棒をやりたかったんだよな』不埒な考えだ。

「で、でも、お金は……」

「金はありません」きっぱりと宣言する。

「……私が水藻殿とお葛殿を命に懸けて、お守り致します」片膝を付き水藻に頭を下げる夜叉王丸。

まるで、姫君に忠誠を捧げる騎士のような光景だ。

「く、空牙様！」慌てて夜叉王丸を立たせた。

「今の言葉に偽りは、ありません」左目の闇で水藻を見る。

「……分かりました」闇を真っ直ぐに茶眼で受け止める水藻。

「……この店を守って下さい」契約の言葉を紡ぐ水藻。

「承知しました」契約は結ばれた。

こうして何とも言えない感じで夜叉王丸は、店の用心棒になった。

そんな事を知らない月黄泉は、女中に脅されながら政務をしていた。

第五話：酒場の用心棒（後書き）

むー！他の女子達には優しい癖に妾には素っ気ないのは何故じゃ！

？ なに？その束縛な性格を直せじゃと？

ふざけるな？！他人にとやかかく言われる筋合いは無いわい！

なら無理じゃと？きいさいさま！！

この場で焼き殺されたいのか？！

か！！

これ！待たん

第六話・疾風の用心棒（前書き）

.....月黄泉じゃ（怒）

今回は、妾の出番も少ないし飛天の情けない姿ばかり  
じゃから、読むでないぞ。

## 第六話：疾風の用心棒

「いらっしゃいませ！」お葛の元気な声が店中に響いた。

「ざるそばを二つ頼む」職人風の男が二人、注文を頼んだ。

「ざるそば二つー！」お葛は奥に叫んだ。

「……あいよー」気怠そうな声が返ってきた。

「さてと、やるか」少し気を静め集中する。

「っしー！」変な声を出して料理を始める。

「ほれ、ざるそば」あっさり作り終え盆に載せ渡す。

「はい、ざるそば二つ」そばをテーブルに置く。

「お、もう出来たの？早いね」二人は出された、そばを食べ始めた。

「じゅっくり召し上がって下さい」一礼して奥に消える。

「ありがとうございます。空牙様」

お葛は店の奥で夜叉王丸に礼の言葉を掛けた。

「水藻殿が留守なんだから俺が手伝わないと」

「それに例の奴がまた来るかも知れないからね」大きな手で頭を撫

でる。

頭を撫でられた、お葛は複雑な気分だった。

恋心を抱いている相手に子供扱いされれば、当然と言えば当然だろう。

実際、お葛は童顔で身体的にも大人の女性には程遠い身体。

比べて姉の水藻は、整えられた顔に出る所は出ている身体。

まさに大人の女性の身体なのだ。

余談だが、月黄泉の身体はスレンダーな身体で、些か女の魅力に欠けている。

水藻は、近くの商店で琵琶の講師をするため留守。

「おーい！茶漬け頼む」客の声が聞こえてきた。

「休憩は終わり。ほい、茶漬け」作った茶漬けをに渡す。

「・・・はい」

拗ねたような口調で茶漬けを受け取り仕事に戻る。

「んー、小さい月黄泉って感じだな」城に居る妻を思い出し愉快そうに笑う。

『今頃、どうしてるかな？月黄泉の奴』

「・・・・・・・・」おのれ、臣下共め・・・・・・・・

書類を片付け、いざ飛天を連れ戻しに城下に行こうと襖を開けようとしたが、開かなかった。

おのれ、結界を張りおったな・・・・・・・・

その後、結界を破ろうとしたが破れず無駄だった。

このような強力な結界は見た事が無い。

「まさか・・・・・・・・母上が」

母上の実力なら那須から指だけで結界を張る位は朝飯前。

飛天を連れて会いに行かない八つ当りか？

果ては他の誰かの仕業なのか？

考えれば考える程、頭が混乱する。

頭を抱えている内に女中が入り書類を置いて出て行ったのを気付いたのは五分後だった。

一方、夜叉王丸は客も落ち着いたので少し早いが、お葛と昼食を頂いていた。

「空牙様って料理が上手いんですね」夜叉王丸の作った料理を絶品する、お葛。

「一人暮らしが長かったからね」今では贅沢尽くしの生活だが……

「だけど、今は水藻殿とお葛殿がいるので」にっこりと笑う夜叉王丸。

「そ、そんな……」頬を染めて照れる、お葛。

「……そ、そう言えば、空牙様は何で家を出たんですか？」照れを隠すために話題を変える。

「……ちよっと同居人と色々あって」

これを聞いたら月黄泉は激怒する所か、ショックのあまり死んでしまっただろう。

「同居人ですか？」

「まあ、大人の事情ってやつだよ」

「……私も数え二百歳で立派な大人です」子供扱いされたのが、癪に障ったようだ。

「二千八百歳の俺と千二百歳の同居人から見たら子供だよ」確かに、子供扱いされても仕方がない。

「そりゃ空牙様と同居人から見たら子供ですけど、私だって嫁に行ける年ごろです!?」声を荒げる。

「嫁に行けるなら、私と結婚してくれませんか?」

「……この声は」二人共、顔を見合わせる。

「用心棒の出番かな」刀を持ち立ち上がる。

「久し振りだな。ガキンチョ」店の奥から顔を出した夜叉王丸に若旦那は驚愕した。

「お、お前は!!」

「ここの用心棒だ。俺が入る限り店には手を出させんぞ」刀の鯉口に手をかけ威嚇する。

「ひい! た、助けて!」裸足で店から逃げ出す姿は滑稽だった。

「ちっ、軽い脅しで逃げ帰るなんて情けねえ」愚痴を零す。

「空牙様は強いですね。あれだけで追い返すなんて……」  
お葛が感嘆の声を聞こえた。

「あの若造が情けなさ過ぎるだけだよ」

「それでも凄いですよ」

「ありがとよ。さあ、飯を片付けて仕事を再開しようぜ」

何事もなかったように仕事を始める二人。

余談だが、裸足で逃げ帰った若旦那は父親の大激怒を買ったそうだ。

若旦那を追い出した夜叉王丸は仕事を続けていた。

「空牙様、そろそろ店仕舞いにしましょう」

最後の客が出て行ったのを見て、お葛が提案した。

「そうだな。じゃあ、店仕舞いにしようか」食器を洗いながら答える。

二人で片付けを始め十五分で終わった。

「さてと、水藻殿を迎えに行つて来るかな」

片付け終えて外出準備をする夜叉王丸。

「えっ？」

「この店には、俺が用心棒だって事は伝わってるはずだから暫らく手は出さないだろう」

「お葛殿は一日中、店に居るから手は出せない」

「……しかし、水藻殿は琵琶の講師で店を出る」ここで、お葛も夜叉王丸の言いたい事を理解した。

「そういう事だから、留守は頼むよ」ぽんと頭に手を置いて店を出る夜叉王丸。

「早く行かねえと……」小走りで水藻を迎えに行く。

その後ろ姿を複雑な表情でお葛は見ていた。

一方、水藻は琵琶の講師を終え帰宅の道にいた。

「早く帰って夕食の準備をしなきゃ」

布に包んだ琵琶を大事に抱えながら急ぐ水藻。

「……水藻さん」前方の道端から大旦那が数人の用心棒が連れて出て来た。

「……ッ!!」後退る水藻。

「そんなに怖がらないで下さい。私は、ただ貴方に求婚を申し込みたいだけですよ」

笑顔を向けたが、水藻は余計に後退った。

「へ、返事は、お断わりです!!」強きに言ったが震えていた。

「その気丈な所が、またそそられますね」意地悪に笑い一歩、進む。

「しかし、今日は連れ返らせてもらいますよ」顎で用心棒達に命令する。

「……………」用心棒達は頷いて水藻に近づく。

『助けて!空牙様!!』用心棒達の手が触れそうになった時だ。

「やれやれー、迎えに来て正解だったぜ」

夜叉王丸が用心棒達の前に立ちはだかっていた。

「空牙様!!」喜びの声を出す水藻。

「……………」また、貴方様ですか「苦虫を噛み潰したような声を出す大旦那。

「悪いな。他人の邪魔をするのが大好きな質でね」ニヤリと笑う夜叉王丸。

「まあ、今日は、先生方を連れていたので負けませんよ」負けじと笑い返す。

「俺達は妖獣大戦を生き残った奴だぜ」自慢気に喋る用心棒達。

「妖獣大戦に出た位で威張るな。それに、お前ら妖狸側に着いてた  
だろ？狸の臭いがプンプンするぞ」

「……………くっ」明らかに動揺していた。

「凶星のようだな」ニヤリと笑う夜叉王丸。

「だ、黙れ！」用心棒達は抜刀して襲い掛かった。

「……………まあ、手加減して歯と腕の二、三本で勘弁してやる」  
指の節を折りながら笑う夜叉王丸。

「死ねい！！」真っ正面から振り下ろされた刀を避け侍の歯に拳を  
打ち込む。

「ふんっ！？」横からの突きを足で払い、左腕にかかと落としを落  
とした。

「こんな実力で、よく妖獣大戦に出れたものだ」もう二人、刀を構  
える用心棒を見る。

しかし、二人共、刀を持つ手が震えていた。

「今日は、貴方様にお譲りしましょう」

大旦那は一礼して身を翻し用心棒達も続いた。

「怪我はなかったか？水藻殿」背後を振り替える。

「は、はいっ。だ、大丈夫です」水藻は地面に腰を落としていた。

「腰を抜かしたの？」

「……………は、はいっ」恥ずかしそうに答える。

夜叉王丸は、腰を抜かした水藻を自分の背中に背負った。

「むさ苦しいとは思うが我慢してくれ」首を動かして謝る夜叉王丸。

「……………い、いいえ！むさ苦しいだなんて思ってません！」ぶんぶん横に振る水藻。

「さあ、お葛殿が夕飯の支度をして待っているよ」水藻を背負いながら歩き出した。

「……………」水藻は夜叉王丸の背中に顔を埋めて吐息した。

沈む夕日を夜叉王丸は眩しそうに目を細めた。

第六話：疾風の用心棒（後書き）

うーす！夜叉王丸だ。

どうだったか

な？最近、更新が遅いのは、新しい小説を書いているかららしいぜ。

まあ、作者しか分からんが楽しみにして  
な！

## 第七話：複雑な恋心（前書き）

今回は好いた男を恋慕う想いと肉親に幸せになって欲しい気持ちを絡ませて書いて見ました。

## 第七話：複雑な恋心

夜になる一刻前に店に辿り着いた。

「ただいまー」裏口から中に入るとテーブルに料理を置いている、お葛がいた。

「あ、お帰りなさい。空牙様、お姉ちゃん……………」  
「したの？」夜叉王丸に背負われた水藻を凝視する。

「……………ええと……………」返答に困る水藻。

「俺の勘通り、奴ら水藻殿を襲おうとしていた」

「ッ!？」

「まあ、間一髪の所で間に合ったんだけどな」お葛は安堵の溜め息を吐いた。

「本当にありがとうございます。空牙様」

地面に下ろされた水藻は改めて礼の態度を取った。

「なあに、用心棒である以上、依頼人の身は守らないと……………」  
「……………」

「それでも、礼を言わせて下さい」

「あの時、空牙様が助けに来てくれなかったら私は……………」

「あの時、空牙様が助けに来てくれなかったら私は今頃……」

「俺が用心棒である限り水藻殿もお葛殿も守ってみせるから……」

「そんな泣きそうな顔をしないでくれ」

いつの間にか涙を流していた水藻の頬を優しく撫でる夜叉王丸。

「……空牙様」水藻は涙を拭き頷いた。

「……はい。頼りにしてますから」

「ああ。任せてくれ」にっこりと笑う夜叉王丸。

二人が慰め合っている間にお葛も自室で涙を流していた。

「……どうしてお姉ちゃんなの!？」

涙を流しながら夜叉王丸に慰められていた姉に嫉妬した。

「ダメ!お姉ちゃんは私より大変だったんだから……」

しかし、直ぐに嫉妬した自分を叱った。

二親が亡くなってから、水藻は、お葛の幸せだけを願って自分の事は後回しだった。

好きな物や欲しい物を諦めて、自分を養うために捨てていった。

そんな姉を信頼し誇りに思った。

だが、同時に激しく嫉妬した。

何時までも大人として扱ってくれない。

店の切り盛りだって百七十歳の時に、やっとの思いで手に入れたのだ。

“私も働ける歳だし一人で出来るよ!?”

この言葉に渋っていた姉も折れて、店の切り盛りを任せて貰えたのだ。

しかし、子供扱いされるよりも我慢ができなかったのは……

「どうして、私が好きになった男の人は、お姉ちゃんを好きになるのよっ」

更に布団に顔を沈め、握り締めていた枕にも力を入れた。

献身的な上に美人な姉に幾度となく求婚する男性がいた。

その中には、初恋の相手もいた。

初恋の相手は幼なじみで同い年の男性。

幼い頃から遊んだ中で何時の間にか、恋い慕うようになった。

百七十歳の時に意を決して告白したが、無惨にも振られた。

“お葛は水藻さんじゃないから無理”

これが初恋の男性から送られた言葉だった。

これを機に仕事により力を入れた。

仕事に打ち込んで失恋の辛さを忘れようとした。

結局、幼なじみの恋も失恋に終わったが、お葛の心には大きな穴が残った。

二百歳になった時に、再び恋をした。

店の用心棒、時雨空牙だ。

浪人だが、礼儀正しく人柄がよく、何より店と自分の身を守ってくれた恩人。

今度は成就したいと思っただが、空牙も自分を女性として見てくれなかった。

歳の離れた妹や娘を可愛がるような扱いだった。

姉には自分より幸せになって欲しいが、自分だって人並みの幸せを掴みたい。

好いた男と憤ましいながらも幸せに暮らしたい。

しかし、好きな男が自分より姉に好意を抱いているために、その夢は叶わない。

大好きな姉と争いたくはない。

だが、好いた男を姉に渡したくもない。

心の中で二つの想いが葛藤して胸が強く締め付けられた。

複雑な恋心を気にしながら自分を呼ぶ姉に返事して自室を出た。

第七話・複雑な恋心（後書き）

どうでしたか？あまり簡潔に書き過ぎでしたか？

逸話・貴方が私の全て（前書き）

この話は、物語とは大して関係ない短篇なので気軽に読んで下さい。

## 逸話：貴方が私の全て

月黄泉は、今日の政務を終えて夜空に浮かぶ月を見ながら物思いに耽っていた。

「……………年月が過ぎるとは速いのう」碧空を見上げる。

夫、飛天夜叉王丸と結ばれてから早三百年。

夜叉王丸との出会いは妖獣大戦の時で、互いに良い印象はなかった。

戦の時も喧嘩をしたりと散々だった。

どうやったら、そんな犬猿の仲の男と一緒にになれるのだろうか？

しかし、喧嘩を重ね、共に戦っている内に彼の優しさや良い所に気付き、いつの間にか彼に恋をしていた。

戦が終わりに魔界に帰った彼を想い、毎夜のように枕を涙で濡らした。

どうしても諦め切れずに意を決して、魔界に文を送った。

……………返事が来ないかも知れない。

しかし、想いを表さないと相手には伝わらない。

やらずに後悔するよりやってから後悔した方が良いと思った。

女から男に文を送るなど下品だと重臣に嗜まれても止めなかった。

否、止められなかった。

最初の文を送ってから実に一ヶ月後に彼から、文が来たのだ。

緊張しながら読んで見ると綺麗な文字で返事が書いてあった。

あんなに喜んだのは生まれて初めてだった………

それから文の交換が繰り返された。

彼の書いた文には、煙草の臭いが染み付いていて初めは嫌だったが、大好きな匂いに変わっていた。

そんな昔を思い出し、戸棚から黒漆の箱を取出して文を取った。

夜叉王丸と交わした文は全て大切に保管している。

今だに煙草臭いが、お気に入り臭い。

「………飛天」文を抱き締めながら姿を消した夫の名を呼ぶ。

夫が姿を消した原因は、明らかに自分にあった。

自由を愛し束縛を嫌う夫にとって苦痛でしかない。

『じゃが、飛天を想ってこそその行為なのじゃ』苦々しく顔を歪める。

しかし、愛して止まないから危険から遠ざけ、自分の傍に置いてい

たい。

夫にしてみれば迷惑、極まりない事だが………  
結果的には、束縛を嫌って姿を消してしたのだが。

自分の過ちを後悔する。

『……どこにおるのじゃ？飛天よ………』文  
を抱き締めて静かに涙を流す月黄泉。

『お主が傍に居なければ妾など、ただの傲慢な女狐に過ぎん』

『お主が妾の元に帰って来てくれるなら、どんな代償も払ってみせ  
よう』

女帝を辞めろというなら辞める。

裸踊りをしろというならしてやる。

退け座して犬の真似をしろというならしてやる。

それで愛する夫が、自分の元に戻ってくるなら構わない。

「……妾にとって主が全てなのじゃ………飛天・  
………」一人で泣く姿を憐れんだように、月は雲  
に隠れた。

逸話・貴方が私の全て（後書き）

これからは逸話も入れて書くので、評価・感想をよろしく願います。

## 第八話：立派な女性に失礼（前書き）

またまた俺が大活躍だ！え？月黄泉はどうしたって？さあ？どうしたんだろ？まあ、気にせず読め！？

## 第八話：立派な女性に失礼

「……………ふうー」

夜の食後を終えた夜叉王丸は、与えられた二階の部屋で煙草を蒸かしていた。

『……………あの娘、泣いていたな』

部屋から戻ってきた、お葛の臉が赤くなっていたのを見て分かった。

「……………つらい事でも遭ったのか、もしくは病気だったのか……………後は、俺に原因があるか、だが……………」

「……………俺、何もしてないよな？」思い当たりにない様子だった。

「んー、俺が原因なら謝らないとなあ。女を泣かせたなんて気分が悪い」

夜叉王丸が何故、女に人気が高いのかは、顔や性格に似合わず女性に紳士だからだ。

人（悪魔）は見かけによらないとは言ったものだ。

「……………明日、聞いてみるか」そう言って床に着く夜叉王丸。

しかし、ひと足早く水喪がお葛に聞いていた。

「ねえ、お葛。私と空牙様が居ない間に何かあったの？」

「別に何もなかったよ」当たり前障りのない返答をするお葛。

だが、姉としての勘か、水藻は妹が嘘を吐いていると見破った。

「……本当に何もなかったの？空牙様も心配してたのよ」

二人を騙している罪悪感が芽生えたが、

「本当に何もないうつ。早く寝よ。明日も早いんだからっ」

強引に話を切り上げ、床に着く妹に諦めたのか水藻も床に着いた。

翌日、お葛は、午前十時くらいに目を覚ました。

『寝坊したよ！？』急いで顔を洗い身支度を整え店に行く。

「う、ごめんなさい！空牙様！？」料理を作っている夜叉王丸に謝る。

「いや、大丈夫だよ。それより朝飯、作っておいたから食べな」菜箸でテーブルに置かれた料理を差す。

「す、すみませんっ」お葛は、頭を下げながらも朝食を頂いた。

朝食を終え腰巻きを付けて料理を作る夜叉王丸の手伝いに向かった。

「これ、三番目のテーブルに持って行ってくれ」

夜叉王丸の作った料理を三番目のテーブルに運び、奥に戻る。

「今日は、どうしたんだい？寝坊するなんて……」  
菜箸で綺麗に盛り付けをしながら、お葛に尋ねる。

「ちょっと、疲れただけです」失笑しながら答えたが

「嘘は駄目だね」あっさりと見破られてしまった。

「男は騙す時に目を逸らさないけど、女は逆に目を逸らすんだよね」  
お葛は何も言えなかった。

「歳のせいかな？長く生きてると分かるんだよね」

可笑しそうに笑ったが、直ぐに真剣な表情に戻った。

「水藻殿も心配してたんだよ」

「……もし、俺に原因があるなら言ってくれないか？」

沈痛な表情をして聞いているが、料理を作る腕は止めてなかった。

『どうしよう？原因は空牙様に歩くけど、恥ずかしくて言えないよ  
！?』

顔を真っ赤にしながら頭を振る、お葛に夜叉王丸は眉を潜めた。

「やっぱり俺に原因があるのかい？」

「……え、えーと、あの、その………  
・あたふたする、お葛。

「……げ、原因は、そ、その、せ、生理が、き、来て!？」

「あつ、そうだったの」何となく納得する夜叉王丸。

「言い憎い事を聞いちゃつて、ごめん」頭を下げる夜叉王丸。

確かに。女性からは言い憎い言葉だ。

「……実際の原因は違うのだが、夜叉王丸は納得してしまった  
ようだ。

「おーい！お茶を頼む」客から注文を受け急いで、準備する、お葛。

「今、行きますっ」お葛は夜叉王丸に頭を下げ仕事に戻った。

それからの二人は、気まずい雰囲気の中で仕事を続けた。

『やっべえな。無理に聞き出すんじゃなかったぜ』

ため息を吐きながら、魚を裁く夜叉王丸。

『ううううう、もう少し別な嘘を吐くんだっ』

客が食べ終えた食器を洗いながら、お葛も溜め息を吐いた。

そんな空気の中、新たに客が入って来た。

「いらっ……」中に入って来た客に、お葛は固まった。

「久し振りだね。お葛」客は、微笑みを浮かべた。

『誰だ？この餓鬼』奥から覗き見る夜叉王丸。

「……ひ、久し振りだね。聡」お葛は、ぎこちなく笑い返した。

『……何で、ここに来るのよ』心の中で毒づいた。

『……元恋人か初恋の相手か？』お葛の態度を見て夜叉王丸は思案した。

「水藻さんは居る？」近くの席に座る。

「ううん。今は、琵琶の稽古に行ってる」

「なんだ。せつかく大人になったから二度目の告白しようと思ったのに」残念そうに肩を沈める。

「そ、そうなんだ」返答する声が震えているのが見て取れた。

『……水藻殿に恋をした餓鬼に、お葛殿が惚れて告白したけど玉砕したって所か？』話の中から推理する夜叉王丸。

「大人になった水藻さんは前より綺麗になったんだろうな」妄想する聡。

『好きな相手以外には冷たい質だな』

他に客も居ないからか、身を乗り出して観察する夜叉王丸。

「しかし、水藻さんに比べれば遥かに劣るけど、お葛も綺麗になったね」

「……………」傷ついた表情をしたが、聡は気付かないのか話し続けた。

『随分と手ひどい事を言い捲る餓鬼だな』心の中で毒づく夜叉王丸。

「三百年前に告白された時なんかは、正直いつて困ったよ」

「水藻さんに告白されたなら泣いて喜ぶけど、お子様のお葛だったからね……………」

「……………」お葛は床に倒れそうな位、ショックを受けた。

告白した時の振られ方もひどかったが、今は、前よりもひど過ぎだ。

「ん？どうしたの？顔色が悪いけど」聡は、お葛に触れようと手を伸ばした。

「その汚ねえ手で、この娘に触るな」奥から出て来た夜叉王丸が、

聡の手を握り締めた。

「誰ですか？貴方は……………？」訝しげな眼を向ける聡。

「誰だつて良いだろ。話を聞いていたが、てめえみたいな餓鬼じゃ水藻殿は、無理だ」

「てめえは、女には優しくするつて事を知らないのか？」冷笑を浮かべる夜叉王丸。

「……………知っていますよ。だから、お葛に手を貸そうとしたんです」握られた手を解こうとしたが、無理だった。

「はっ、“淑女”を傷つけた餓鬼がふざけた事を……………」お葛は驚いた。

昨日は、子供扱いした夜叉王丸が今度は、淑女扱いをしたのだ。

「俺から見れば子供だが、それでも水藻殿に劣らない立派な“淑女”だ」

「そんな事も分からない尻の青い餓鬼が偉そうに言うな」

「な、何を！？」聡は激怒して振りほどこうと暴れたが、更に力を込められた。

「俺に喧嘩を売るとは良い度胸だが、愚か者だ」ミシミシと聡の手が悲鳴を上げた。

「……………ぐわぁ」床に膝を着く聡を侮蔑の眼差しで見下ろす夜

又王丸。

「……………さつさと店から出て行け。そして二度と顔を出すな」  
手の力を緩めて聡を店の外に蹴りだす。

「……………ッ」聡は震える足に力を入れ逃げ出した。

「……………ごめんな」夜又王丸は振り返り、お葛に謝った

「他人の色恋に口を挟んだりして」

「昨日は、子供扱いしたけど今日の健気に耐える姿を見て、お葛殿は立派な“淑女”だって分かったよ」

「だから、あの餓鬼の言った事なんて気にしちや駄目だよ」

お葛の頬から流れる涙を救いながら語る。

「……………空牙様」お葛は我慢出来ずに夜又王丸に保たれ掛かった。

「……………ふっ、……………くっ」溢れ出した涙は、止められずに流れ出た。

夜又王丸は、ただ黙って抱き締めて泣き止むのを待っていた。

誰も居ない昼前の店で、お葛は、静かに激しく泣き続けた。

第八話：立派な女性に失礼（後書き）

どうでしたか？かなり読み憎かったですしょうけど、また読んで下さ  
い！？

第九話：逢いたくて愛しくて大脱走（前書き）

久しぶりの登場じゃ！？妾を忘れてはおらんじやろうな？

忘れたなら、これを読んで思い出すが良いぞ！？

## 第九話：逢いたくて愛しくて大脱走

「……はあ」執務室の窓から賑やかに活気づく城下町を見下ろしていた。

飛天が妾の手から離れて一月が経つ。

その間に使りもなく、日々は、ただ過ぎて行くばかりで憂鬱になる。

何度か飛天が城を出た事はあったが、一月も留守にはしなかった。

飛天が出て行く度に、激しく後悔と怒りの念がくる。

何故、飛天を縛ったりする？

その度に今度は広い心で我慢しようと誓ったが、出来なかった。

妾を置いて、何処か遠くに行ってしまうのではないか？

もう二度と帰って来ないのではないか？

そんな不安な気持ちが発火して飛天を縛り付けてしまう。

今回の件も妾に非があるのは解るが、これ以上、飛天の帰りを待ち続けられるほど、忍耐強くはない。

『今日こそは、飛天を妾の手に取り戻す！』決意を新たに閉じられた襖に視線を向ける。

何度も妾の狐火を跳ね返した忌まわしき結界を攻略してみせようぞ。始めに軽い狐火を放ち、間を置かずに第二、第三と除々に力を加える。

経験を生かし、この結界は連続の攻撃に弱いと分かった。

『……………この結界を破壊しても二重になっておるかも知れんからな』

力を制限しながら狐火を放ち続ける。

段々、結界に小さいながらひび割れが入って来た。

もう少しで割れる。

確信して更に狐火を放つと案の定、結界は妾の前で碎け散った。

このまま部屋から飛び出しかつたが、良い作戦を思い付き部屋に留まった。

「月黄泉様、朝食をお持ちしました……………ツ！  
？」

時間通りに朝食を運んで来た女中を気絶させ、着物をすり替えて、

悠々と自室を後にした。

ふっ、我ながら良い作戦じゃったな。

思わず笑みを浮かべて歩いていると、妾を軟禁した女中と鉢合わせした。

「月黄泉様は？」変化の術を見破れないとは甘いな。

「不貞腐れて眠っておいでですわ」自分の事を馬鹿にするのは嫌な気分じゃな。

「月黄泉様にも困ったものね。昔は殺伐として嫌だったけど、今は今で、夜叉王丸様に甘えぱっなしで嫌なのよね」

……ほう。妾の前で嫌なのと、良く言えるな？

「私達が夜叉王丸様に近づくだけで、ハリネズミみたく全身を逆立てるんだから困ったわよ」

「まあ、夜叉王丸様に捨てられるんじゃないか？って気持ちがあるから、縛ってるんでしょうけどね」

女中の言葉に我慢していたが理性の鎖が千切れた。

「……燃え尽きる」一瞬で女中を黒焦げにした。

「飛天を連れ戻したら城から追放じゃ」ぷすぷすと煙を上げる女中を見下ろす。

女中をその場に残し小舟が置いてある水門に歩を進める。

小舟に乗り込み誰も居ないのを確認して、小舟を動かす水門を通過した。

『主を必ず見つけ出し妾の手に取り戻して見せる』小舟を漕ぎながら、城下町を睨む。

一方、月黄泉の脱走を知る由もない夜叉王丸は、自分の胸で泣き続ける、お葛を抱き締めていた。

「泣けるだけ泣いて良いんだよ」泣き続ける、お葛の頭を優しく撫でる。

「…………ふっ、くっ、うっぐ……………」何度止めようとしても流れ出した涙は、止まる事を知らなかった。

それから十分経過。

今だに泣き止まない、お葛を抱いたまま店を開いた訳にはいかない。

「今日は、もう店仕舞いにしよう」「ぽんぽんと背中を叩きながら離れるように促す。

しかし、拒否をするように首を振る、お葛。

「でも、このままだと客が来ちゃうから、な？」優しく諭すと渋々といった具合で離れた。

「片付けは、俺がやるから部屋で休んでな」お葛は小さく頷き、部屋に戻った。

「さてと、片付けをしないと」暖簾を降ろしに店の外に出ると一刻ほど前に追い出した青年が立っていた。

「二度と来るな、と忠告しただろ？」暖簾を降ろしながら青年を睨む。

「……そんな忠告を聞いた覚えはありません」一刻で立ち直ったのか、冷静に答えた。

「頭の螺旋じねが二、三本ないようだな？」冷笑を浮かべる。

「何とでも。それよりも私と立ち合って頂きたい」手にした刀を見せる。

「私が勝ったら、この店から出て行って下さい」

「なら、俺が勝ったら命を貰うぞ」青年は目を見張った。

「立ち合いをするんだ。それ位の覚悟は持て」

「……解りました。良いでしょう」緊張した声色で返答する青年。

「少し待ってる。店の片付けをしてくる」中に戻り手早く片付けを済ませた。

お葛の部屋に行くと泣き付かれたのか眠っていた。

目を覚まさないように布団を被せ部屋を出た。

「……………では行こうか？」刀を腰に差し店の外で待っていた青年と歩き出す夜叉王丸。

店を出た二人は、町から少し離れた丘の上で対峙していた。

「……………ここが貴方の墓場です」青年が手を上げると数十人の男達が夜叉王丸を取り囲んだ。

「……………お久し振りですね。お待さん」青年の横では大旦那と若旦那が微笑んでいた。

「……………手を組んだのか」ぽつりと呆れた口調で喋った。

「この人数では、太刀打ち出来ないでしょ？」嘲笑う声が周囲から聞こえた。

「この程度の人数で俺を倒そうとは笑止千万」

落ち着き払い煙管を蒸かしだす夜叉王丸。

「お前らのやり方を卑怯とは思わんが、女を泣かす奴らには、きつい仕置きが必要のようだな」

「……戯言を」青年が冷笑した。

「戯言かどうか、その身で味わうんだな」

背中から漆黒の翼を出し、意識を集中する。

「幾多の屍の山を築き、その身を血と涙で濡らした蛇よ。その身を刃に変え我に仕えよ」

呪文を唱えた瞬間、雷が宙を舞い、突風が巻き上がった。

「来い、朧月！」天に手をかざすと雷が直撃した。

周りを白煙が包んだ。

「これを使うのは“天魔大戦”以来、だな」

視界が広がると前には、妖艶な輝きを見せる蒼き大太刀を握る夜叉王丸がいた。

「……そう言えば名前を言ってなかったな」大太刀を肩に置きながら笑った。

「俺の名前は、地獄帝国男爵、飛天夜叉王丸だ」血の気が引いていく一瞬。

そして後悔の念が押し寄せた。  
嗚呼、自分達は、何て事をしたんだ。

自分達の王である女性の夫であり、妖獣大戦の英雄を敵に廻すなんて………

「さあ、誰から来る？」

一同は散を乱し脱兎の如く逃げ出した。

「おいおい。誰が逃げて良いと言った？これから、お仕置きの間が始まるんだぜ」

うつすらと笑いながら翼を羽撃せ一同に襲い掛かる夜叉王丸。  
はばたかせ

………三分後

「………やれやれ。とんだ茶番だったな」

煙管を蒸かしながら夜叉王丸は、気絶している男達を見上げた。

「この里から消えろ。二度目はないぞ」翼を背中に戻し背を向ける夜叉王丸。

「・・・・・・・・・・・・・・・・や、やっと、見つけたぞ。飛天よっ」

前方に荒い息を出しながら仁王立ちする月黄泉と視線が合った。

「おお、月黄泉。久し振りだな」

鬼気迫る形相の妻に恐れもせず笑いながら近づいた。

「その格好だと、城から脱獄したようだな？」

着ている着物を見て瞬時に悟った夜叉王丸は、下から睨む妻を面白そうに見下ろした。

「ふざけるな！！一月も妻から離れおつて!？」

「半年間は外出禁止じゃ！！覚悟しておれ!？」怒鳴りながら夫の胸板を叩く。

「・・・・・・・・まあ、仕方ないから受け入れてやるよ」

寛大な物言いだだが、そろそろ帰ろうと考えていた、夜叉王丸にとつては良かったらしい。

「何が仕方ないじゃ!」

しかし、妻の怒りが治まる所か更に噴火したのは、言うまでもない。

「悪い悪い。その詫びに今夜は、たっぷり可愛がってやるか

ら

肩まで伸びた灰銀の髪を撫でながら耳元で艶やかな声を出した。

「~~~~ツ!?」耳まで真っ赤にしながら月黄泉は夫を睨んだ。

「そ、その言葉! 忘れるでないぞ!？」ぶんぶん怒りながら月黄泉は、後ろを向いて歩き出した。

「へいへい。女帝様のお望みのままに」畏まりながら後を追う夜叉王丸。

『文だけ置いて帰るのは性に合わんが、こいつが許す訳ないし、仕方ないか』

二人の姉妹が無事に生きられる事を祈りながら、夜叉王丸は、月黄泉と城へと帰宅した。

それから、店に帰宅した水藻と眠りから覚めた、お葛が眼にしたのは一通の手紙だけであった。

この二人が夜叉王丸の側室に成るのは、もう少し後の話である。

第九話・逢いたくて愛しくて大脱走（後書き）

ふふふふ、ついに飛天が妾の手に帰って来た。……………それでは失礼するぞ。これから愛しい飛天に抱かれるのでな……………

逸話・また会うその日まで（前書き）

今回は、夜叉王丸も月黄泉も出ないので、御了承ください。

## 逸話：また会うその日まで

『拝啓 突然、姿を消す事をお許し下さい。』

私としても、まだ留まりたかったのですが、どうしても出来なくなりまして。しかし、貴方達を悩ませていた奴らは、退治いたしましたので安心して下さって結構です。 貴方達と過ごした一月は楽しかったです。

また、会える日を楽しみにしています。

どうか、お

元気で・・・・・・・・・・

浪人 時雨 空牙』

「・・・・・・・・・・」最後まで手紙を読み終えた水藻は、丁寧に手紙を畳んで床に置いた。

「・・・・・・・・・・空牙様」お葛は、涙で充血した瞳から再び涙を流した。

「・・・・・・・・・・お葛」水藻も耐えられなくなり、涙が溢れんばかりに零れ落ちた。

あの用心棒が訪れてから一月余り、二人は毎日が楽しかった。

母親のように優しく、父のように威厳があり強く二人を護ってくれた用心棒。

そんな用心棒に恋心を抱いていたが、想いを告げる前に消えてしまった。

暫らくの間、涙を流していたお葛だったが、涙を拭いた。

「……………姉さん。泣くのは、もう止めよう」

「空牙様の手紙に書いてあったじゃない。『また会える日を楽しみにしている』って、だから、お店を開けて待っていていようよ」

「……………お葛」水藻は、幼いと思っていた妹の成長ぶりに目を見張った。

泣き虫で自分が慰めていた妹が、自分を慰めているのだ。

「空牙様は、また会うつて手紙に書いたんだから、必ず来るよ」

「だから、二人で待っていていようよ」姉の手を握り力説する、お葛。

「……………ええ。泣いていても、何も始まらないものね」涙を拭いて妹の手を握り返す。

「うんっ。空牙様なら必ず来るよ」

「……………ええ。そうね……………じゃあ、二人で夕食の準備をしようか」

「うん！」一緒に立ち上がり夕食の準備を始める。

……………また会える。

何時の日になるのか分からないけど、また、必ず会えると信じている。

・・・だから、また会えた、その日には、美味しいと言ってくれた料理をご馳走しよう。

そして、その時に自分の想いを伝えよう。

受け入れられるかは、どうかは、分からないけど、それでも貴方に自分の想いを伝えたい。

だから、その日までは、二人で頑張ろう。

二人の姉妹は、互いに用心棒への想いを胸に、頑張ろうと誓った。

そんな二人を励ますかのように、夜空に高く昇った上弦の月が店を照らしてくれた。

逸話…また会うその日まで（後書き）

次は、オールキャラが出る予定なので楽しみにしててください。

第十話・夫婦揃ってお忍び（前書き）

今回は下手くそながら俳句を書きましたので、読んでみて下さい。

## 第十話：夫婦揃ってお忍び

「…………んー」眠りから目を覚ました妾は、隣で規則正しく眠る飛天がいた。

「飛天……………」やっと捕まえた。

愛おしくて愛おしくて止む事を知らない妾の殿方。

飛天が城を出てから一月ずっと抱かれていなかった妾を飛天は宣言した通り、たっぷりしつぱと褥しとねの中で可愛いがってくれた。

久し振りに味わった飛天の身体は、媚薬と言っても過言ではない位に妾を酔わせた。

嗚呼、これから半年間は飛天と甘い甘い生活が送れると思うと、眼から鱗が落ちそうじゃ。

自然と笑みを深くしながら妾は、眠る飛天の唇を奪った。

…………んふふふふ、愛しておるぞ。飛天。

それこそ殺してやりたい程にのう……………

まだ朝にもならぬ真夜中の時の妾の愛の告白じゃ。

翌日の朝、妾にしては珍しく朝寝坊じゃった。

「起きたか、月黄泉」ぼやけた視線を向けると飛天と視線がぶつかった。

「んー、まだ眠りから覚められぬ。主の熱い口付けで目を覚まさせてたもれ」

甘えた声で飛天の胸に擦り寄る。

「……まったく朝から我儘な女狐だな」小さなため息を吐きながらも妾に口付けをしてくれる飛天。

「目が覚めたか？」唇を離しながら尋ねる飛天。

「ん、目が覚めた」名残惜しかったが、あまり我儘を言う訳にもいかない為*に*我慢した。

「よしっ」満足そうな声をしながら飛天は褥から立ち上がった。

「そう言えば、お前が寝ている内に女中が来て、暫らくは政務を休んで良いだよ」

ふふふふふ、当然じゃろう。

飛天が居なくなってから一月、ほぼ休みなしで働いていたのじゃからな。

この半年間は何一つ仕事はせぬぞ。

「何を一人でにやけてるんだ？傍から見ると不審者に見えるぞ」訝しげな視線を送る飛天。

そんな視線でも妾にとっては、愛しい殿方に見られてると取っつまう。

やれやれ、これは妾が思っていた以上に飛天が恋しかったようじゃな。

「?????」頭に疑問符を浮かべながら飛天は部屋を出て行き、妾も後を追って夫婦仲良く顔を洗った。

朝食を済ませた後は、二人で貝合わせをしたり絵巻物を見て過ごした。

午後は楽や舞をしたり池に船を浮かべ紅葉を楽しみ充実した日であった。

夜は夜で、飛天の膝の上で夕食を頂き湯にも一緒に入り床も一緒で言う事なしの一日じゃ。

そんな充実した日々を三月ほど過ぎた日であった。

中庭に植えてあった木の下で飛天に膝枕をしてもらっていると

『城下で紅葉祭をやるそうよっ』

『本当？じゃあ、イケ面も来るかな？』

と女中達の会話を耳にした時に飛天が微かに反応したのを妾は見逃さなかった。

「のう、飛天。主もそろそろ城下に生きたいのではないか？」伸ばした右手で飛天の頬に触れる。

「ほう？俺の心を読んだのか？」

「三百年も主の妻を務めている訳ではないぞよ」「くすりと笑う。

「まあ、否定はしない」苦笑しながら妾の狐耳を摘んだ。

飛天は伊達に“風の男爵”と言われている訳ではなく異名通り、常に旅や外出をしている。

三月も城に閉じ込められては我慢の限界じゃろうて。

「妾が納得するような秋の句を言えば、祭りに行って良いぞ。もちろん妾も一緒じゃがな」

「ならば、女帝様がお喜びになられるような句を読みましょう」

落ちてきた紅葉を一葉つまむと

「秋風に 流れて魅せる 紅葉の君」

「どつという意味じゃ？」些か不に落ちぬ点があった。

「秋風に揺れる紅葉の君のお姿に魅せられた、というつもりで読ませて頂きました」

「紅葉の君とは、誰の事じゃ？」まさか、他の女子ではあるまいな？

「これは面妖なことを仰せになられる」口の端だけで笑う飛天。

「紅葉の君とは、女帝様の事ですか？」

「……妾？」少し呆気に取られた。

よもや飛天が、こんな洒落た事を言うとは……………

「どうしました？女帝様の為に読み上げた句、お気に召しませんか？」

「……いや。最高の句じゃったぞ」首を振り静かに膝から上体を起こす。

「そなたの句、真に見事であった」

「有り難き幸わせ」

「主の句へ返句じゃ」瞳を閉じて読み上げる。

「我が想い 秋水の如く 流れ行く」

「妾の想いは、秋水の如く清らかで真つ直ぐに、主に行くと読んだ」

「素晴らしき句を頂き、この飛天夜叉王丸、感激いたしました」あ

ぐらから正座になり頭を下げる飛天。

「句の礼に、今宵の祭りに招待したいのですが、よろしいでしょうか？」

何時の間にか妾が誘われる形になったが、それも一興かの。

「うむ。主の招待を受け取ろう」

「では、牛車の用意を致すため失礼します」立ち去ろうとする飛天の後ろ姿を見て急に一月前の事が頭を過った。

また、妾を置いて何処に消えてしまっているのではないか？

もしかしたら、もう逢えぬかも知れない。

そう思った瞬間、身体は無意識に動いていた。

立ち去ろうとした飛天の着物の裾を掴んだ。

「……………牛車の用意など女中に任せておけ」するりと飛天に擦り寄る。

「……………目を離すと直ぐ何処かに消えてしまっからな」不安気な声が出てしまう。

「……………風なので、自由気儘な性分でございます」食い下がる飛天。

「牛車の用意が出来るまで傍にいてくれ……………これは女帝としての命令ではなく、一人の女としての願いじゃ」

妾の手を優しく振りほどくと正面から抱き締めてくれた。

「……………牛車の用意が出来るまで貴方様の傍にいきましょう」

恐らく、気紛れじゃろうがそれでも構わなかった。

「例え、気紛れじゃろうが礼を言う」飛天の背中に手を回し抱き締める。

「もっと強く妾を抱き締めてくれ」

「……………お望みのままに」飛天は更に抱き締める腕に力を入れてくれた。

飛天に抱き締められると心地よく安心できる。

飛天は妾の願い通り、牛車の用意が出来るまでずっと抱き締めてくれた。

そして牛車の用意ができると妾と飛天は、数人の共を連れ城下町に向かった。

この時、妾は紅葉祭でライバルが出来るの知らなかった。

第十話：夫婦揃ってお忍び（後書き）

すみません！下手すぎる俳句ど本当すみません！？

第十一話：お忍び紅葉祭で一暴れ（前書き）

何じゃ！？これは！！作者？！どついつ事じゃ？なに読めば分かる  
じゃと？

## 第十一話：お忍び紅葉祭で一暴れ

「……………おお、紅葉が美しいのう」

牛車の中から見える紅葉は色鮮やかに映り、風に揺られて舞い上がっていた。

「……………風流だな」牛車の外で紅葉を眺めている飛天の声が聞こえた。

声を出しただけで、周りから、きゃあ、きゃう、などと言った悲鳴が聞こえてきた。

くっ、やはり、恐れていた事が起きてしまったか。

城を出る際に飛天の服装を陣場織りから、薄青の狩り衣を着せ、髭も剃らせ、の手入れもさせたので女中達が騒いだ。

城の中で、こんな騒ぎなのだから城下町に出たら結果は、目に見える。

事実、城下町に降りた途端に周りから小娘共の黄色い悲鳴が聞こえてきたのだからな。

そうなる事を懸念して牛車の中に押し込もうとしたが断られてしまったので、気が気ではない。

じゃが、それと同時に飛天が自分の夫である事が嬉しくてたまらない。

自分の夫が、ここまで人気があると妻の妾も鼻が高いというものじや。

「……………」むっ、飛天め、妾から離れようとしておるな。

「これ、飛天。どこに行く気じゃ？」

「少しだけでも駄目なのか？」

「……………」どこに行く気じゃった？」

「城下町で世話になっていた店に用があるんだ」

何やら、女の臭いがするのう。

しかも二人分のな。

「別に肉体関係も恋慕もないから安心しろ」

妾の心を読んだように言った。

主に恋慕の気がなくとも女の方にはあるのじゃ！？

駄目だと、言おうとした矢先に

「……………」空牙様」妾より先に飛天に声を掛けた者がいた。

人間でいうなら二十前半と十代前半じゃな。

見た目は、色白で着ている着物も粗末じゃった。

しかし、姉か母と思われる娘の身体だけは、いわゆる“ボン！キュッ！ボン！”じゃった。

飛天に抱かれるようになってからは、妾の胸も少しは膨らんだがとても太刀打ちできそうにない。

もう一人の娘は童顔に幼児体系じゃが、どこか艶があり美しく見えた。

誰かに恋をしておるな。

直感で分かった。これでも人妻。

恋する乙女の見分け位は出来る。

「水藻殿、お葛殿」飛天の声に耳を傾ける。

むっ、二人とも飛天の知り合いか。

恐らく、城下に降りた際に知り合ったという娘達じゃな。

「まさか、こんなに早くまた、お会い出来るとは……………」二人の娘は涙で潤ませた瞳で飛天を見た。

この二人、飛天に恋をしておるな。

「……………飛天、この娘達か？そなたが会いたがっていた者達とは？」握っていた扇に力が入った。

「ああ。城下で世話になった水藻殿とお葛殿だ」

妾の声から怒りを察しながら平然と答える飛天。

どうせ、出て行った着物からして浪人、偽名を使ったのじゃろうな。

飛天がやりそうな事じゃ。

「空牙様、そちらの牛車の方は？」妾の事を言っている事が分かる。

「こちらは、俺が新しく仕える事になった貴族の姫君だよ」

すぐに否定しようとしたが今宵は、忍びで来た事を思い出し止めた。

この時間を我慢すれば良いだけ。

我慢じゃ。我慢。

「貴族様っ」二人の娘は慌てて頭を下げた。

「そんな畏まらないで。今宵は、姫の我儘で忍びだから」

苦笑する飛天の様子に更に扇を握り締めた。

が、我慢じゃ。こんな事で怒っては女帝の誇りが許さん。

「……姫、お体の具合がよろしくないようっで？」

妾が我慢しているのを感じ取った飛天が、気遣うように牛車に近づいた。

「・・・少し目眩がしました。そろそろ戻りたい」声を押し殺して答える。

「畏まりました。では、早々に帰る準備を・・・」

飛天は、離れていた女中達を呼び帰る支度をさせた。

「申し訳ない。姫君の具合が芳しくないので、これで失礼するよ」

二人の娘に事情を告げ別れようとする飛天。

「準備が出来ました」女中達の声でした。

「では、これで」一礼して妾を乗せた牛車と身を翻す飛天。

「あ、あの、空牙様、待つて下さいっ」去ろうとした飛天を呼び止めた。

「・・・嫌な予感がするのは気のせいかな？」

娘達の瞳が潤みを更に増したぞ。

「・・・わ、た、私、私は！空牙様を、お、お慕いしています！」

「・・・な、なんじゃと？」

ひ、飛天を、妾の夫である飛天を、慕っているじゃと!?

握り締めていた扇が音を立て二つに折れた。

ゆ、許さん。許さぬぞ。

飛天は妾だけの男。

他の誰にも渡さぬ。

誰にも………渡さぬ。

牛車の外に出ようとした時に

「お久し振りですね?お侍さん」

ん、誰じゃ?一体?

「……お前ら、二度目はないと言わなかったか?」不機嫌そ  
うな声を出す飛天。

「……ええ。覚えておりますよ。ですが、諦めが悪い性分  
で」

牛車の中から聞いたが、品のない下劣な声じゃ。

「……お前らに情けを掛けた俺が馬鹿だった」

牛車の外から苦しそうな飛天の声が聞こえてきた。

飛天を苦しめる不屈な奴らは、妻である妾の敵。

娘達の前に飛天に仇なす輩を成敗するとするか。

「……………飛天」牛車の中から声を掛ける。

「何だ？俺はこの屑を掃除するから邪魔をするな」

殺気立った声の飛天に身震いした。

この声、妖獣大戦を思い出すわ。

「主の敵は妾の敵じゃ。どうじゃ？ここは夫婦で協力して屑を掃除せぬか？」牛車から身を出す。

「……………良いだろう。足を引っ張るなよ？」隣に立つ妾を愉快そうに眺める飛天。

「心配には及ばぬ。たかが数百の屑など他愛無い」

目の前には、数百の屑がいたが大した数ではない。

「水藻殿、お葛殿。こつちへ」二人の娘を女中達に手渡す飛天。

「主ら、覚悟は出来ておろうな？我が夫、飛天夜叉王丸に刃を向けるとは」

数百の屑に動揺が走った。

娘達も飛天と妾を凝視するように目を見張った。

まあ、当然であるうな？

「さあ、行こうか？月黄泉？」

すらりと刀を抜く飛天。

「おお、大暴れと行こうか？飛天」掌で狐火を作り上げる。

ふふふふ、久し振りに憂さ晴らしじゃ。

……十五分後

「はあー、久し振りに大暴れして愉快じゃった」

女中に扇で煽あおがせながら飛天に笑い掛ける。

「俺としては暴れ足りないんだがな」

地面に倒れる屑を足蹴にしながら飛天は不機嫌そうに言った。

まあ、後ろで控えている娘達に血生臭い現場を見せたくなかったの  
であろうな。

さてと、屑の掃除には終わったが娘達の件が残っておったな。

「……………面を上げ」娘達を呼び寄せ顔を上げさせる。

「……………水藻とお葛と言ったか？」

「は、はいっ」怯えた眼差しで妾を見る二人。

「飛天が城下に居た際、世話になったそうだな。礼を言っぞ」

「飛天が世話になった件で我が夫に恋慕の情を抱いた罪を許してしんぜよう」

ふふふふ、こう言えば娘達も諦めるじゃろつて。

本来なら飛天に恋慕しただけで極刑じゃが、寛大な心を見せてやるう。

「夜叉王丸様に世話になったのは私共です。そして夜叉王丸様を恋い慕う気持ちに変わりはありません」

「……………なん、じゃ……………」

妾は言葉を言う事が出来なかった。

普通なら、忘れるとか、もう致しません、と言うはずなのに、この娘達はそれをしない。

初めは呆気にとられたが直ぐに分かった。

嗚呼、そうだ。この娘達は妾と同じだ。

好きな男の為なら、死も厭わない。

まさに恋する乙女は無敵の強さを持つ。

同じ女として感心するが引けない。

飛天は妾の男。今もこれからも……………

他の女になんぞ渡さぬ。

「……………そうか。では仕方ない。主らを……………殺す」

狐火を丹念に作り上げる。

「せめてもの情けじゃ。痛みもなく燃やしてやる」

じつと二人は妾を見つめていた。

「……………では、さらばじゃ」狐火を放とうとしたが飛天が二人の前に出た。

「……………何の真似じゃ？飛天、そこを退け」動揺したが必死に隠した。

「お前の嫉妬で殺されるような娘達じゃない」

「……………嫉妬、か。主の全ては妾の物じゃ。例え恋慕の情だろ  
うと見逃す訳にはいかぬ」

「俺なら好きにしる。だが二人に手は出させん」今度は動揺を隠せなかった。

「何故じゃ！何故そこまでして庇い立てする？主は妾より、その小娘共を取るといふのか？！」

涙で瞳が熱くなり嗚咽が止まらなくなった。

「今のお前と、この二人を選べと言つなら俺は迷わず二人を選ぶ」

今度こそ言葉を失った。

妾より、あの小娘共を迷わず取る。

頭の中で回り続けた。

「勘違いするな。俺はお前が嫌いな訳じゃない」

呆然とする妾に飛天は冷静に語った。

「お前は女帝だ。民の幸せを考えるのが王としての務め」

「一時の感情で守るべき民の命を奪うなど愚の骨頂だと玉藻にも言われたはずだぞ」

母上の言葉が脳裏に浮かんた。

『月黄泉、覚えて置きなさい。王たる者、守るべき民に手を挙げるは、もつとも恥べき行為よ。常に民の幸せを考え政をしなさい』

“守るべき民に手を挙げるは恥べき行為”

妾は、今、その教えを破ろうとしていた。

例え、嫉妬であろうと民に手を挙げようとした。

だから、飛天は妾より、小娘を取ると言った。

妾は、愚かな女帝だ。

守るべき民の幸せを考えずに民を傷つけようとした。

……こんな妾は女帝失格じゃ。

飛天に嫌われても仕方がない。

………だけど、だけど、狂おしい程に飛天が恋しくて堪らないのも、また事実。

母上なら上手く、この場を治めたじやろうが、妾は出来ない。

所詮、妾は女帝になる資格のない女子。

涙が止まらずに溢れていると、瞼をゴツゴツした手が優しく拭ってくれた。

「………飛天」

「お前、また自暴自棄になってるだろ？」

「……だつたら、何じゃ？」触れられた手を振り払うように顔を背ける。

「主に見捨てられたら自暴自棄にもなるわ」拗ねた口調で答える。

「……言つたはずだ。嫌いな訳じゃないと」

しかし、強引に顎を捕まれ視線を合わせられた。

「お前は感情が直情すぎるだけだ。後は女帝としての才能はある」

「それにな……」ニヤリと口端だけで笑う飛天。

「玉藻が傍に居るから大丈夫だ」

母上か？母上は那須に居るはずじゃが？

首を傾げる妾。

「おい、玉藻。そろそろ出て来いよ」咽喉でくつくつ笑いながら飛天は、明後日の方を向いた。

飛天の視線を追つと

「はい。月黄泉？元気だった？」

一人の艶やかな上臈の立ち姿が幻影のように浮き出て来た。

柳の五つ衣に紅の袴をはいて、唐衣を重ねた

「……………は、母上!?!?」

が立っていた。

第十一話：お忍び紅葉祭で一暴れ（後書き）

なにか読めば分かるじゃ！？こんな展開など許さんぞ！？

逸話・三人の恋敵（前書き）

更新が遅れてすみません！！新しい携帯の使い方が分からず悪戦苦闘中です！！

## 逸話：三人の恋敵

「・・・・・・・・・・・・・・・・」執務をこなしている妾の隣で琴の音色が聞こえる。

決して上手いとは言えないが、練習を重ねれば上手くなる音色じゃ。

くっ、執務をしている妾の隣でやるとは嫌がらせか？

そんな事を思っていると、音色が止んだ。

・・・・・・・・・・やっと終わりか。

「そうそう。二人共、覚えが早くて助かるわ」机に置かれた玉露を飲む妾の隣で楽しそうに笑う元女帝で妾の母上。

赤を主体にした十二単衣を着た母上は見た目、二十代前半の宮廷女中と言った所か？

「そ、そんなっ、御前様の教えが、上手いからですよ」母上に恐縮したように消え入りそうな声で言う二人の姉妹。

姉は落ち着いた青色を主体の十二単衣に身を包み、妹の方は緑と黄色を主体の十二単衣を着ていて、中々の絵になっていた。

この二人の姉妹の名を水の方と葛の葉の方と言う。本名、水藻、お葛。

元料亭の主人と従業員だったが今は、妾の愛する夫である飛天の側

室。

ちなみに母上も那須の屋敷を引き払い妖狐の里へ引越して来て飛天の側室に納まっている。

この二人と自分を側室にするように飛天を誑かしたのも母上。

我が母ながら、憎たらしい恋敵。

あの紅葉祭から一月が経った。

現在、二人は母上が手習いを教えている真つ最中。

そして妾と三人の夫となった飛天はというと、妾の目の前で母上の膝で昼寝をしていた。

くっ、心地良さそうに眠りおって……………

妾が膝枕をしてやろうとしたら嫌がったくせに、母上には自分から

「……………玉藻、膝枕してくれ（はあと）」

などと、甘えた素振りをする。

何故じゃ?!母上の膝枕で眠る飛天に問い詰めると

「年上の余裕よ」

母上に返されてしまい何も言えなかった。

くっ、おのれ！母上！！

「どうしたの？月黄泉？手が震えてるけど？」飛天の前髪を白い指で撫でながら母上が尋ねてきた。

分かっていながら、聞いてくるなんて……………  
我が母ながら心底、憎いと想わずには入られない。

妾の愛する飛天を奪ったにも係わらず、更に自分を含め二人の側室を送り込んで来るなどと舐めた真似をしおって……………

「……………月黄泉」不意に眠っていた飛天が妾の名を呼んだ。

寢言で妾の名を呼ぶとは、一体どんな夢を見ているのやら？

「寢言で貴方の名を呼ぶなんて、妬けるわね」母上が少し羨ましそうに言った。

「母上達と違って、伊達に夫婦をしていた訳ではありません」勝ち誇ったように笑う。

ふふふふふ、寢言で妾の名を呼ぶとは、可愛い奴じゃ……………

「それなら私や水藻ちゃんやお葛ちゃんだって同じよ」

しかし、直ぐに言い返された。それも聞きたくない言葉を……………

……………

そう、母上は人間だった頃の飛天を二人の側室は、浪人の飛天を知っている。

妾の知らない飛天を二人は知っている。

「ふふふふ、妬いてるわね」無意識に掴んでいた湯飲みに力が籠っているのを見て母上が小さく笑った。

「そう、貴方が知らない飛天を私達は知っているわ」

悔しい。飛天は妾の夫であるのに……………

「悔しい？」

嘲笑う笑みを浮かべながら母上は妾を見た。

「……………」唇を噛み母上を睨む。

「まあ、まあ、喧嘩はしないで」二人が必死の形相で止めに入った。

「……………」今日は二人に免じて止めにしましょう」母上が身を引き妾も身を引いた。

「zzzzzzzz」そんな事を知らずに飛天は昼寝をしていた。

くっ、幸せそうに眠りおって……………

「



逸話・三人の恋敵（後書き）

今度は出来るだけ早く更新するよう努力します!?

第十二話：女帝VS大御所（前書き）

更新がまた遅れてすみません（爆）

## 第十二話：女帝VS大御所

皆が起床して妾も同時に起き上がり、目と鼻の先にある飛天の部屋に向かった。

勿論、愛する夫の飛天を起こす為じゃ。

本当なら昨日も一緒に寝たかったのだが、思った以上に政務に手こずり叶わなかった。

部屋に入ると煙草の臭いが充満していたが平気だ。

「飛天、朝じゃ。起きてたもれ」

頭から布団を被り眠っている飛天を揺さ振る。

「………眠い」

布団を被ったまま気怠い声が返ってきた。

女帝自らが起こしに来たのにその態度は何じゃ!?

「駄目じゃ、今日は“二人だけ”で遠乗りに行く約束したはずじゃ!?!」

妾の怒鳴り声で布団が捲れた。

「ッ!?!?!」

天が眠っていた布団の中には、寝巻きを振り乱し銀の髪と金色の九尾を惜し気もなく晒し出して眠る母上の姿が……………

「んー、飛天。寒い」

母上はすりすりと妾の飛天の胸板に頬擦りをした。

「……………あら？どうしたのかしら？月黄泉？女帝とも在ろう者が眼を吊り上げて布団を握り締めてるなんて？」

わざとらしく、今気付いたように話す母上。

「身体が震えてるわよ？もしかして寒いのか？」

「寒いなら火鉢でも使って温まれば？私は飛天の胸で温まるから」

……………ぶつち

「この……………泥棒狐が！！」

我慢できずに狐火を母上に放つ。

勿論、妾の愛する飛天は避けておるぞ。

狐火は母上を直撃したが異変に気付いた。

「…………腕を上げたようだけど、まだまだね」

くすりと笑いながら母上は妾の狐火を指で弄んだ。

「たかが“銀狐”の分際で、この“仙狐”の私に勝てると思ったの？」

そう、母上の階級は妖狐の中では最高位の仙狐（天狐、空狐）で対して妾は仙狐に遙かに劣る銀狐の位。

「実の母を泥棒呼ばわりするとは、良い根性してるじゃない？」

指で弄んでいた狐火に軽い息を吐いただけで炎が倍の大きさになった。

「受け止めてみなさい」

放たれた炎は大砲の弾のように大きかった。

「くっ……」

急いで结界を張ったが直ぐに破壊され爆発を起こした。

「きゃあああ！！」

爆発の衝撃で部屋の外に弾き出された。

「あらあら、可愛い悲鳴を上げちゃって」

膝を着く妾を面白そうに見る母上。

くっ、おのれ、母上。

「おい、玉藻。やり過ぎだぞ」

妾をからかう母上を飛天が叱った。

さすが妾の夫、気が利くのう。

「だって母親に手を上げたのよ。お仕置きは当然じゃない？」

「俺なんて毎日のようにベルゼブルを殴ってたぞ」

胸を張って言い切る飛天。

ベルゼブル・・・・・・・・・・飛天の養父にして魔界の最高権力者の皇帝で妾の義父に当たる。

最近、魔界に出向いてないのう。たまには顔を出さぬといかぬな。

「それでも手加減してたでしょ？月黄泉のは明らかに手加減無しよ」

飛天に反論する母上。

確かに、妾の放った狐火は手加減どころか殺す気じゃったからな。

「そうだろうが、その辺にしておけ」立ち上がって妾に近づく飛天。

「・・・・月黄泉」

片膝を着いて妾の頬に掛かった墨を拭ってくれた。

「・・・・・・飛天」

感動の余り涙が出てきた。

母上に虐められた妾を甘い言葉で慰めてくれるのか？期待した気持ちで待ち侘びていたが……

「お前じゃ、玉藻に勝てない。諦めろ」

「それが悲しんでいる妻に掛ける言葉か!？」

怒り任せに飛天に狐火を放ったが、風の結界で阻まれた。

くそ!!情けで一度くらい焼かれる!!

「私にも勝てないのに飛天に勝てる訳ないでしょ？」

着物の乱れを直しながら母上が笑った。

「それよりも夫に手を上げるなんて、どういっつもりよ？」

笑いから詮索するような眼差しに変わって妾を見てきた。

「……」

妾は何も言えずに押し黙った。

「まさか、何時も手を上げてるの？」

何も言わずにいる妾に詰め寄る母上。

その瞳は、愛する飛天を傷つけられて怒りに染まっていた。

飛天は妾の夫なのに……………

「いや、毎日じゃない。俺が無断外出したり、帰りが遅い時だけ仕事としてやられる位だ」妾に代わり飛天が答えた。

「まあ！そんな事で仕事きされたの?!」

「私ならそんな酷い仕事きなんてしないで、優しい仕事きをして上げるのに」

優しくない仕事きで悪かったですね!!母上!?

「覚えておきなさい、月黄泉。男はね、優しくて包容力のある“大人”の女性を求めているものなのよ」

「その言い方、妾は大人の女性、淑女ではなく子供だと言っているように聞こえますが?」

「あら?分からなかったの?自分の身体を見て分からない?」

ぐっ、妾の気にしている事をよくも……………!?

「飛天に抱かれて多少は大きくなったようだけど……………まだまだね」

……………ぐぐぐぐ

「そんな貧相な身体じゃお葛ちゃんにも負けちゃうわよ?」

あのような幼児体型の小娘に負けるじゃと?!

.....もう我慢できん.....!?

「玉藻、いい加減にしろ」

再び狐火を放とうとしたが厳しい声で飛天が母上を叱った。

その表情は何時になく険しかった。

「.....はい」

叱られた母上はふて腐れた子供のように頬を膨らませた。

「お前は一度、朝風呂に入って来い」

埃ほこりと汚れた妾を見ながら飛天は立ち上がって部屋を出ようとした。

『そうじゃ!良い事を思い付いたぞ!?』

「のう、飛天。たまには夫婦で仲良く朝風呂に入らぬか?主も若干だが、汚れておるじゃろ?」

着物の裾を掴んで上目使いで飛天を見上げる。

「.....まあ、たまには良いか」

「また、気紛れじゃな?」

飛天の裾を掴んで立ち上がる。

「まあな」

否定もせずに飛天は前に進んだ。

「それでは、母上。これで失礼します」

皮肉を込めながら妾は、母上に笑いかけ部屋を後にした。

ふふふふ、これで少しは仕返しが出来たかの？

余談だが、妾と母上、飛天の三人で一騒ぎしている時に水藻とお葛は情眠を貪っていたらしい。

## 第十二話：女帝VS大御所（後書き）

次回は早めに更新できるように頑張るので感想をお願いします！？

逸話・朝風呂で幻想術（前書き）

更新が遅れてすみません！今度も遅れるかもしれない（爆）

## 逸話：朝風呂で幻想術

「 妾は鼻歌を歌いながら着ている着物を脱いだ。」

「 あー、身体が怠い」隣では気怠い声を出しながら飛天が着物を脱いでいた。

「 昨日は母上と何をしていた？」

自分で不快な気持ちになるのは、分かっているが聞かずには入れなかった。

「 んー、酒を飲んで、抱いた」

「 ……そうか」やはり聞かなければ良かった。

まあ良い。今日は妾が朝から晩まで飛天を一人占めじゃからな。

「 何にやけてるんだ？」さっさと着物を脱いだ飛天は妾を置いて先に行ってしまった。

「 あつ飛天。ま、待ってくれっ」急いで着物を脱ぎ捨て後を追う。

「 きゃあっ」慌てて行ったので簀の子に足を滑らせ転んだ。

「 朝から盛大に転ぶな」冷ややかな眼差しを向ける飛天。

「 手くらい貸しても良いのではないか？」打った腰を摩りながら涙目で睨む。

うううっ、痛い。

「怠いのに」文句を垂れながらも優しく抱き上げてくれた。

流石、妾の夫。優しいの

しかし、そんな甘い一時もつかの間で風呂に放り込まれた。

「きゃあ！」ざっぱーんつと水しぶきを上げて湯の中に沈んだ。

「何を……っ!？」文句を言おうとしたが、母上が飛天に抱き着いていた。

しかも一糸纏わぬ裸で。

「玉藻、いき成り抱き着くなよ。月黄泉が落ちただろ？」迷惑そうに顔を歪める飛天。

「んー、私も簀の子で滑っちゃったの（はあと）」

可愛いらしく謝っていたが瞳の奥が、悪戯が成功したと物語っていた。

「母上……」怒りを抑えながら湯から上がる。

「今日は月黄泉と一日過ごすから今度な」

妾が怒る前に飛天が母上を窘めた。

「えー！何で！！別に良いじゃない！？」

当然、母上からは不平不満の声が出た。

「前からしてた約束なんだよ」

おお、流石は飛天。女子との約束を健気にも守るとは感心じゃ！

「……………」この言葉に母上は完全にへそを曲げた。

「大丈夫か？月黄泉」湯に沈んでいた妾を抱き上げてくれた。

「助かったぞ。飛天」夫の首に抱き着く。

どうじゃ？母上？羨ましいか？

「身体洗いつこでもするか？」

「おお、良いのう」落ち込む母上に見せ付けるように喜ぶ。

「じゃあ、やるか？」

「優しく頼むぞ？飛天」

先に飛天が妾の背中を洗ってくれた。くうー、気持ち良い。「どうだ？久し振りにやるから、下手か？」

「とんでもない！前よりも心地が良いぞ」

「そうか？それなら良い」背中を洗い終わると今度は髪を洗い始め

た。

「くうー、気持ち良い。もっと洗ってたもれ」

「分かった」妾の頼みを快く引き受けてくれる飛天。

本当に最高の殿方じゃ。一生、離さぬぞ？飛天。

「髪の毛の次いでだ。耳掃除もしてやる」ぬるりと飛天の舌が妾の耳の中に入ってきた。

「おお！飛天！？」快楽に身を委ね飛天に縋ると、違和感に気付いた。

むっ、この違和感………幻術か！！

飛天から離れ狐火を放つと簡単に飛天の姿は消え風呂場には妾だけが残っていた。

このような高等な幻術を扱える者は、妾と飛天、母上しかない。

そして、こんな馬鹿な事をするのは母上しかない。

「くっ、おのれ！母上！？」恐らく妾を風呂に蹴り落とした時に術を掛けたのだろう。

冷静に判断し直ぐに飛天を探しに濡れたまま着物を羽織り浴室を飛び出した。

待っておれよ！飛天！？

逸話：朝風呂で幻想術（後書き）

出来るだけ早く更新するので評価感想、お願いします！？

第十三私：愛の逃避行（前書き）

いつもは大人の玉藻が乙女になっていきますので、見て下さい！？

### 第十三私：愛の逃避行

月黄泉が城の中を走り回っている時、玉藻と夜叉王丸は城の外に出  
ていた。

「はい、飛天<sup>トウテン</sup>あーん」

ゆるゆると独りでに進む牛車の中で玉藻は、白い絹のような手で持  
った箸で豚の角煮を綺麗に摘んで夜叉王丸の口に運んだ。

普通なら大御所と現女帝の夫が二人だけで城の外を出歩くなど考え  
られないが、それはそれ。

二人とも化け物を超えた実力者なので不貞な輩に襲われても指一本  
で倒せる位の実力を持っているのだ。

卑怯だ、不平等だの外野が五月蠅いがまったく気にしない二人。

「……………」無言で口を開け角煮を頬張る夜叉王丸に玉藻は  
「そんなに拗ねないで。私だって貴方と遠乗りに行きたかったんだ  
から」宥めるように苦笑した。

何故、夜叉王丸が可愛い気もなく拗ねているのかというと、風呂場  
で拉致？されたからだ。

「今日は、月黄泉と遠乗りの約束だったんだぞ？」不機嫌丸出しの

声で玉藻を睨む。

「良いじゃないー。月黄泉は、百年以上も貴方と一緒に暮らしてたのよ？ちよつと位、貴方と一緒にいても良いじゃないー」ぶうと頬を膨らませる玉藻。

「だから、月黄泉との約束を果たしたら連れて行ってやるって言っただろ？」

「私が我慢強くないって知ってるでしょ？」

箸を床に置き艶やかな仕草で夜叉王丸の頬に触れる玉藻。

その姿は何処か哀しさを秘めていた。

「……貴方を忘れた事なんて一度だってないわ。瀕死の私を助け、殺しに来た人間から私を命懸けで逃がしてくれた」

「……月黄泉の夫として来た時は、正直いつて月黄泉を殺そうとしたわ」

「貴方の隣に居るはずだったのは、私なのに……」  
月黄泉だなんて認めたくない」

声に微かな震えが混ざっているのを夜叉王丸は感じ取った。

「月黄泉の夫になっても貴方は、私に逢いに来てくれた」

「……一時の逢瀬だったけど、私にとっては幸せだった」

遠い眼をしながら呟く玉藻の頬から流れる涙を夜叉王丸は優しく拭いた。

「優しいわね。子は親に似るものと、言ったものだけど男の好みも一緒とはね」

「だけど、月黄泉に貴方を想う気持ちは負けない」

「……貴方と一緒になら肉体が滅び冥府魔道の道を歩む無間地獄に堕ちても構わないわ」

夜叉王丸の唇に自身の唇を重ねた。

「……飛天」唇を離し潤んだ金色の瞳で夜叉王丸を見つけた。

「……姫」かつて、人間だった頃に玉藻を呼んでいた名で呼んだ。

「……懐かしい名ね」くすりと笑った。

「だけど、もう姫なんて呼ばれる歳じゃないわ。人間でなら皺々（しわしわ）のお婆ちゃんよ」

苦笑いする玉藻に夜叉王丸は微笑んだ。

「……お前は、昔のままだ」しかし直ぐに否定した。

「いや、違うな。お前は今だからこそ美しい。昔のお転婆で我儂な

姫君だよ」

「お世辞が上手くなったわね」夜叉王丸の胸に倒れ込む。

「今回だけだぞ？」玉藻の足まで伸びた銀髪を撫でながら苦笑する。

「……貴方も昔と変わらないわ。傲慢で気紛れで無責任だけど、それを補う優しさを持っている」

「……前よりも素敵になったわね」

倒れ込んだ夜叉王丸の胸の温かさに酔いながら玉藻は瞳を閉じた。

「……ありがとよ。姫」自身も瞳を閉じて二人して横になった。

一人で進む牛車は当てもなくまた歩き出した。

「……飛天！」妾は城の中という中を探し回った。

だが、まったく見つからなかった。

「くそっ！母上め、飛天を何処に連れて行きおった！？」苛々と探し回っていると

「・・・・・・・・・・あ、あの、月黄泉様」背後から呼ぶ声がした。

この声は

「・・・・・・・・何用じゃ？水藻、お葛」飛天の側室の水藻とお葛を見る。

「は、はい。少し言いたい事が・・・・・・・・」「もぐもぐと口籠る二人。

「・・・・・・・・話したい事があるなら早く申せ。妾は急いでいるのじや」苛々とした口調で喋る。

飛天が見つからない苛立ちをついぶつけてしまった。

「は、はいっ。これだけ城の中を探しても見つからないとなると、お二人は城の外に行ったのでは、ないでしょうか？」

妾の気迫に怯えながらも途切れ途切れに言った。

外・・・・・・・・・・迂闊じゃった。その手があったか。

「水藻、お葛」

「はっ、はい！」名を呼ばれ緊張する二人。

「今から、飛天と母上を探しに外に出る。二人とも準備をせい」妾の言葉に戸惑う二人。

本来なら妾だけで行くつもりだったが、この二人も加われば母上も反省するだろうと判断した。

「早くせんか!」怒鳴り声を上げると二人は急いで各々の部屋に向かった。

「外出の準備をせい」傍に控えていた女中に命令を出し妾も部屋に戻る。

………待つておれよ。母上。飛天との遠乗りを邪魔した罪をたっぷりと払わせて貰いますぞ?

そして飛天よ。必ず母上の毒牙から助けてやるぞ。

第十三私：愛の逃避行（後書き）

少し狂気染みた想いでした！！

逸話：一時の逢瀬（前書き）

今回は短めの詩みたいなき感じて書いてみました。

## 逸話：一時の逢瀬

十六夜の月が天に高く昇り地上を照らしている中で私は彼を待っていた。

“月が天に昇っている間はお前だけの物となろう”

彼と交わした約束。

その言葉通り貴方は私の為に月夜に不似合いな漆黒の翼を広げて逢いに来てくれた。

貴方が来る時は必ず黒い翼が落ちて来るから直ぐに分かる。

そして何時も私の為に紫の花を持って来てくれる。

………紫の花は悲しみを意味する。

そんな話を貴方にしたら鼻先で笑われた。

“下らん”その一言で終わらせた貴方。

そんな花を好きな私を周りは物好きだと笑ったけど、貴方だけは違った。

“どの花を好きになるのも本人の自由だ”と言って私の髪に口付けを落とした。

貴方と初めて会った時よりも長く伸びた髪はもう足まで伸びた。

貴方は覚えてないだろうけど、貴方が“長くて綺麗な髪だな”って言ったから伸ばしたのよ。

私に花を渡すと用意した酒を私に酌をさせて一緒に月を眺める。

月を見上げる私の瞳は何処か遠い瞳をしていると貴方は言った。

貴方の片方しかない黒き瞳は全てを見透かす瞳。

だから幾ら嘘を吐いても直ぐに知られてしまう。

それでも私は嘘を吐く。

何でもないと答えて離れようとしたが腕を掴まれた。

こうなると本当の事を言わなければ離してくれない。

観念して私は重い口を開いた。

“貴方をずっと、・・・・・・・・・・永遠に私の物に出来ないのが悲しい”

単なる私の身勝手な我が儘だ。

月の出ている夜しか貴方は私の物に出来ない。

それが、悲しくて悲しくて仕方がない。

貴方を私だけの物に出来れば、どんなに嬉しい事だろうか？

貴方と二人だけの世界で生きて貴方に抱かれ続けられたい。

嗚呼、何て醜い心なのだろう。

何て浅ましい欲望だろう。

こんな私を貴方はどう見るのだろうか？

“浅ましい欲望だな”

嗚呼、やはり貴方も他の同じなのね。

“その浅ましい欲望が俺を惹きつけて止まないのだろう”

そう言つて貴方は私を引き寄せた。

嗚呼、忘れていた。貴方は人では在らず悪魔だという事を忘れていた。

欲望に忠実な悪魔だからこそ、私の浅ましい欲望を受け入れてくれた。

“その浅ましくも美しい罪なる業をもつと見せる”

私の欲望は罪、浅ましさは業。

その代償に肉体が滅び輪廻転生が適わず冥府魔道の無間地獄に落とされても構わない。

貴方が私の手から離れずに留まるのなら喜んで、この身を捧げましよう。

そう。貴方さえ私の傍から離れずに居てくれれば他には何も望まない。

逸話：一時の逢瀬（後書き）

感想評価を待っています！

## 第十四話：道行き不安（前書き）

更新が遅れてすみません！出来るだけ早く更新しますから！！

## 第十四話：道行き不安

ゴトン、ゴトン

妾と側室の二人を乗せた牛車はゆっくりと飛天と母上の牛車を追っていた。

しかし、その速さの遅さに妾は苛立っていた。

「遅い。これでは母上の牛車に追い付けぬではないか!?」妾は苛々と扇を叩いた。

「ま、まあまあ。落ち着いて下さい……」水藻が宥めるように言った。

「主は心配ではないのか?! 仮にも自分の夫が消えたのだぞ!」

「そ、それは心配ですが大御所様と一緒になら大丈夫ではないでしょうか?」

水藻の言葉にお葛が頷いてみせた。

「主らは何も分かつたらんな。母上と一緒にだから心配なのじゃ」

「……?」

二人は首を傾げる。

「母上の実力なら簡単に飛天と人間界に行つて身を隠すなど造作も

ない」

「そうならば厄介じゃ」自分だけが唯一の存在になりたい。

「母上が飛天と恋人だった時があつたのは知っておるじゃろう？」

二人して頷く。

「母上が手傷を負っていた所を飛天が助けて手当てをして看病し、更に追つ手から命懸けで護り抜いたらしい」

人間の頃から無茶はしていたようじゃな。

「別れの時に、また会う約束をしたらしい」

「……そして約束を守り二人は再び会つた」

話し終えて二人を見る。

「……あの、話を聞いていると夜叉王丸様と玉藻様は運命の赤い糸で結ばれているような気がするんですが……」

怖ず怖ずと言つた口調で水藻が言つたが

「何を言う！？緊急事態ではないか？！愛し合う二人が愛の逃避行をするかも知れないではないか！？」

「そ、それはそれで良いではないでしょうか？」消え入りそうな声でお葛が言つた。

「お葛！お主は嫌ではないのか？！愛する飛天を奪われたのだぞ？！」掴み掛かり揺さぶる。

「つ、月黄泉様っ、落ち着いて下さい！！」水藻が静止を呼びかける。

「ぐうううう」乱暴にお葛を解放し妾は扇を握り締めた。

「おのれ……………母上。この妾から飛天を奪い去るとは！！」握っていた扇が音を立てて粉々に砕け散った。

「この怨みどうして晴らしてくれようか……………?」

「ひい！！」「水藻とお葛が悲鳴を上げ抱き締め合つのを尻目に妾はどうやって母上から飛天を取り戻すかを考えていた。

「……………覚悟しておれよ。母上。必ず飛天を連れ戻してみせる」

憤る妾と怯える側室の二人を乗せた牛車はゆっくりと歩み続けた。

第十四話：道行き不安（後書き）

評価感想お願いします!?

第十五話：追いつ追われっ（前書き）

最近、更新が遅れてすみません！！

## 第十五話：追いつ追われつ

「……………ん？」

玉藻と横になつていたが何かを感じ取つたのか起き上がる夜叉王丸。

「どうしたの？飛天」玉藻も起き上がって尋ねた。

「どうやら月黄泉が追い掛けて来たようだぜ」

「予想より早いわね」大して驚きもしない玉藻。

「しかも、水藻殿とお葛殿を連れて来てるぞ」

「あらあら、二人も災難なこと」少しも哀れんでない口調だった。

「どうするんだ？素直に捕まるのか？」

「冗談でしょ？この私が簡単に捕まって上げる訳ないでしょ？」

ニヤリと笑う瞳は心から今の状況を楽しんでいた。

「そうだな。姫はそんな甘い女じゃなかったな」

夜叉王丸は苦笑して懐から竜笛を取り出した。

「俺も少しだけ邪魔してやるか」

「魔曲、“魔霧”」

竜笛を吹き始めると霧が濃くなり周りを包み込んだ。

「相変わらず聞く者を心酔させる音色ね」

うつとりと声を漏らし夜叉王丸にもたれ掛かる玉藻。

「これで暫くは足止め出来るかな？」

玉藻の肩を優しく抱いて銀髪を撫でる。

「ええ。十分だわ」白く長い指を夜叉王丸の頬に触れる玉藻。

「私と貴方が一時の逢瀬を楽しむには十分よ」

「そうだな。五月蠅い奴らが来るまで楽しむか」二人は折り重なるように再び床に倒れこんだ。

「愛してるわよ。飛天。それも殺したい程にね」玉藻の言葉に夜叉王丸は微笑んだ。

「罪の業が大きな姫さんだな。まあ、そこが良いんだがな」

静かに、しかし深く玉藻の唇に口付けを落とした。

「……むっ」霧が深くなり周囲が見えなくなるにつれ妾は不快な気持ちになった。

この霧、ただ自然に起きた霧じゃないな。

「ど、どうなさいましたか？月黄泉様っ」

水藻が妾の微かな反応に気付いた。

「この霧は飛天が起こした霧じゃ」

「えっ？」

「夜叉王丸様が？」

「あ奴は養子でも地獄帝国の皇太子。この程度、造作もない事じゃ」

妾の言葉に絶句する二人。

この二人は自分の夫がどれ位、力があるのか知らんようじゃな。

まあ、それも仕方ないかのう。

飛天の功績は伽話のような功績じゃからな。

疑われても仕方ない。

飛天の功績が本当だと証明できる者は戦場を共にした者だけじゃ。

「信じる信じないは主らの勝手じゃが、油断していると倍返しを食

らう事になるぞ」

大真面目な顔で語る妾を見て二人は小さくだが、こくりと頷いた。

「飛天がただの霧を発生させたとは思えん。二人とも油断するでないぞ」

飛天が妾に牙を向けるとは思えんが、油断は禁物じゃな。

妾と二人の側室を乗せた牛車はゆっくりと霧の深い道の中に入って行った。

第十五話：追いつ追われっ（後書き）

もう少しで終盤だと思います。長編より中短編になりそうな感じ  
です（爆）

第十六話・予想は的中（前書き）

今回も短いですが、楽しんで下さい。

## 第十六話：予想は的中

妾と側室の二人を乗せた牛車はただ延々と前を歩いて一刻は経ったであろうか。

何か可笑しいな。

懐から二百年前に飛天から送られた金の懐中時計を見つめた。

「…………やはり飛天の仕業じゃな」

飛天から貰った懐中時計は時計と同時に魔力などを感知する優れ物じゃ。

もともと妾から逃げる為に開発したそうじゃが……………

「どうして分かるんですか？月黄泉様」二人が妾の持つ時計を覗き込んできた。

「この時計が鈍く光る時は何かしら魔術が発生している時じゃ」

「恐らく母上が泣き付いて飛天がやったという所じゃな」

本当は母上が頼まずとも自らやったであろうかの……………

「それでどうするんですか？」

「この手の術は火か土の術で解ける」

「火なら月黄泉様の狐火で解けるのでは？」

「妾の力だけでは無理じゃろうな」

「どうしてですか？」

「飛天の事じゃから妾の狐火に備えて手扱かりはないはずじゃ」

事実、あ奴が仕事や戦で手を抜いた所など見た事がない。

「じゃあ、どうするんですか？」

不安そうに尋ねる二人の側室。

「……ふむ」暫し思索して

「お主ら、土と火の術は使えるか？」

「は、はあ。一応、二人とも使えますが？」

「ならば妾に力を貸せ」

「妾の狐火と主らの狐火と土遁の術を融合させて飛天の術を破るの  
じゃ」

「そんな事が出来るんですかっ？」二人は身を乗り出してきた。

「うむ。かつて一度だけじゃが飛天とした事がある」

妖獣大戦の時に飛天の風の術と妾の狐火を合わせて妖狸を一瞬で消滅させた時があった。

後に飛天から

『この術は他の術とも融合できるから機会があれば試してみる』つ  
と言われた。

今がまさに試す機会。

「良いか？失敗は許されんぞ。この一撃で決める気でやるのじゃ！」

妾の言葉に緊張した表情で頷く二人。

「……では用意は良いな？」

再度、確認をする妾に二人はしっかりと頷いた。

それを確認して妾は意識を集中して狐火を放った。

「……狐火！！」

「狐火！？」

「土遁の術！？」

妾の後に水藻が狐火を放ちお葛が土遁の術を放った。

三つの術は一つになり弾けるように閃光を放ち辺りを光りで包んだ。

「……くっ」あまりの眩しさに目を手で覆う。

やがて光りが治まり瞳を開けると霧が消えていた。

「どうやら術を払う事に成功したようじゃな」

水藻とお葛に視線をやると二人とも啞然としていた。

「なんじゃ？どうしたのじゃ？」

妾が尋ねると二人は

「あ！え、と凄い術だと思ひまして！！」

成る程。確かにこれを見れば啞然とするか。

「じゃが、これで終わった訳ではない。飛天を奪い返して決着が着く」

「はっ、はいっ」二人は身を引き締めた。

「その調子じゃ」

満足して牛車の中に入ると牛車は再び歩み始めた。

待っておれよ。飛天。必ず行くからな。

第十六話：予想は的中（後書き）

後、四、五話で終わるかもしれません！？

## 第十七話：愉快的逢瀬（前書き）

・  
・  
初めに言います。今回ら若干ですが大人の表現がありますので・・・

## 第十七話：愉快な逢瀬

「……………」

夜叉王丸は沈めていた顔を不意に顔を上げた。

上半身が曝け出した裸体は全身が傷だらけで傷がない場所などなかった。

この傷が彼が今まで歩いて来た道の凄惨さを物語っている。

「……………どうしたの？飛天」

夜叉王丸の下では着物を着崩し潤んだ紫の瞳で玉藻が見上げてきた。乱れた十二単からは雪のように白い足と月黄泉とは比べ物にならない位の立派な二つの山が見え隠れしていた。

「俺の術が破られた」短く答える夜叉王丸。

「……………くっ、月黄泉もやるじゃねえか」

愉快そうに笑う夜叉王丸と対照的に玉藻の顔は面白くなさそうだった。

「なんだ？我が子の成長が嬉しくないのか？」

「……………今は恋敵よ」

ぶすつと頬を膨らませて答える玉藻。

「そう怒るなよ。まあ、怒った顔も可愛いから良いがな」

子ども染みだした草をする玉藻に笑いながら夜叉王丸は玉藻の端整に整えられた唇に口付けた。

「……………ふっ……………んっ」夜叉王丸の口付けを甘んじて受ける玉藻。

「あいつも俺に会いたいが為にしてる事だ」

唇を離し苦笑して諭すように喋る夜叉王丸。

「……………」玉藻は怒り心頭の表情で夜叉王丸を睨み付けた。

「何よつ。さつきから月黄泉の事ばかり……………」  
八つ当たりで九つの尾で夜叉王丸を叩いた。

「私の方が貴方を好きだし喜ばせる事だって出来るのに月黄泉ばかり……………」

ぺしぺしと胸板を叩く尻尾からは甘くて酒に酔ったような香りがした。

初めは甘んじて玉藻の好きなようにさせていたが暫くすると飽きたのか

「あんまり悪戯が過ぎると仕置きするぞ?」



埋もれた。

二人を乗せた牛車は甘く妖艶な香りを漂わせながら深く森の中に入  
って行った。

第十七話：愉快的逢瀬（後書き）

すみませんっ。変に書いてすみません!？

第十八話：先は遠い（前書き）

段々、終盤に近づいてきます！

## 第十八話：先は遠い

「・・・・・・・・・・」

玉藻は荒い息をしながら全身汗だくになりながら惜しみもなく曝け出した裸体を床に沈めていた。

「そんなに疲れたのか？」

煙管を蒸かしながら夜叉王丸は玉藻の身体を優しく撫でた。

「・・・・・・・・・・飛天の意地悪っ」ぷいっつと顔を背ける玉藻。

本当なら身体ごと背けたかったが、身体に力が入らず顔だけを背ける。

「くくくくくつ、負けん気が強いのも月黄泉と同じだな。流石は親子だ」咽喉元で笑いながら夜叉王丸は紫煙を吐いた。

「さあて、そろそろ月黄泉達も追い付いて来る。次の手を打つか、それとも大人しく捕まるかどっちにする？」

意地悪な笑みを浮かべながら尋ねる夜叉王丸に玉藻は

「・・・・・・・・・・決まってるわ。まだ捕まらないわ」

「意地悪な俺とまだ一緒に逃げるのか？」

少し驚いた表情をする夜叉王丸。

「…………意地悪でも私は貴方が好きなの」

「くっ、姫みたいな美女に慕われては男冥利に尽きるぜ」

愉快そうに笑いながら夜叉王丸は床に広がった玉藻の銀髪に自身の唇を付ける。

「…………煙草の臭いが染み付くわ」

「俺の物って印を付けるんだ。良いだろ？」

「出来るなら身体に付けて欲しいわ」

「なら、そうするか」

「あ……………」

声を上げた時には胸元にくっきりと紅い痕が付けられていた。

「これで良いだろ？」

「ええ。これで良いわ」

満足気に笑う玉藻。

「さて、貴方の次は私の番ね」床に身体を沈めながら指を軽く鳴らす玉藻。

「これで大丈夫ね」にっこりと微笑む玉藻。

「何をしたんだ？」煙管を口に銜え直し尋ねる夜叉王丸。

「ちょっと過激な試練かしら」悪戯っぽく笑う玉藻。

その顔は幼さを残す少女の笑顔だった。

「過激？姫の過激は半端じゃないだろ？」

「また月黄泉の心配してるの？」不機嫌な表情になる玉藻。

「あいつは慣れてるから良いんだよ。問題は水藻殿とお葛殿の方だ」

「二人なら大丈夫よ。月黄泉が一緒だもの」

月黄泉ではないのを聞いて笑顔に戻る玉藻。

「なんだ？二人には妬かないのか？」

「あの娘達は良いのよ。私から見たら赤ん坊だもの」

「私には月黄泉の方が厄介よ。我が子だからこそ怖いのよ」

「そんなものかねえー」適当に相槌を打つ夜叉王丸。

「そんなものよ」夜叉王丸から煙管を奪い自身の口に銜える玉藻。

「私は飛天みたいに優しくないわよ。月黄泉」

紫の煙を吐き不敵に笑う玉藻を見ながら夜叉王丸は床に身を投げ瞳

を閉じた。

『やれやれ。 姫と月黄泉に付き合わされた二人は哀れだぜ』

そんな事を思い夢の世界に夜叉王丸は旅立った。

第十八話：先は遠い（後書き）

もう少し付き合ってください!?

第十九話：おのれ母上！？（前書き）

間もなくクライマックスです！？

第十九話：おのれ母上!?

「ひいひい!?!月黄泉様!?!」

「月黄泉様!怖いよ!?!」

「・・・・・・・・少し離れんか」

妾の腰にしがみ付く側室の二人に妾は嫌そうに溜め息を吐いた。

飛天の術を破った妾らは更に母上達の後を追ったが途中で道端でとぐるを巻く大きな蛇に出くわした。

どうせ母上の差し金じゃろつ。

よほど飛天を妾に渡したくないようじゃな?

妾も母上の気持ちは理解できなくはないが、自分の愛する夫を渡す訳にはいかない。

何としてでも飛天を妾の胸に取り戻してみせる。

「・・・・・・・・」

妾は腰にしがみ付く側室の二人を何とか引き離し大蛇に近づいた。

「つ、月黄泉様つ。駄目ですよ!?!」

「そうですよ!危ないですよ!?!」

後ろから側室の二人が騒いでいたが気にせず前を歩んだ。

母上の差し金なら飛天の術より危険。

だが、飛天を妾の手に取り戻せるなら多少の危険は覚悟の上じゃ。

何せインド、中国、日本を荒らし回った母上を相手にするのじゃから命を捨てる覚悟で行かなくては飛天を取り戻せない。

「このようなミミズ如きに恐れているでは飛天は取り戻せぬ」

妾の言葉を聞き大蛇が起き上がった。

「ひい!?!」

後ろでは側室の二人が悲鳴を上げて抱き合っていた。

「そのミミズ。妾は先を急いでいる。大人しく道を開ければ良しじゃが……」

一端、言葉を切る。

「……飽く迄、母上に味方し退かぬなら容赦せぬぞ?」

五つの銀の尻尾を青白い炎で燃やし右手で狐火を構える。

「もう一度だけ聞く。そこを退くか退かぬか、どちらじゃ?」

「……」

答えとばかりに大蛇は尻尾を妾に目掛けて振り下ろして来た。

「ふっ、どうやら退かぬようだな」

尻尾を避けて妾は後方に跳躍した。

「……ならば実力で通るまでじゃ」

狐火を放ち尻尾の炎を燃え上がらせる。

「生憎と妾は飛天を取り戻す為なら、母上だろうと容赦はしない」  
次々と狐火を放つ。

「ぐわわわわあああああああ!!」

全身を炎に包まれた大蛇は悲鳴を上げながら火を消そうと躍起になつていた。

「無駄じゃ。この炎は飛天から直々に教わった煉獄の炎。簡単には消えん」

「もう一度だけ言う。そこを退け」

「………グウ」

恨めしい声を上げながら大蛇は姿を消した。

「………ふん、口ほどにもない」

牛車に呆然とする側室の二人を入れると妾は再び牛車を走らせた。

……母上。この借りは必ず返してみせるぞー!?

第十九話・おのれ母上!?(後書き)

題名は映画、陰陽師の敵役の「おのれ!晴明!」で思い付きました。

**第二十話：現金な姫君（前書き）**

もう少しで完結です！

## 第二十話：現金な姫君

「……………ん」夜叉王丸は背中を叩かれる感触で目を覚ました。

瞳を開け背中を見ると玉藻が眉を吊り上げ九尾で背中を何度も叩いていた。

「どうした？そんな怖い顔して？」あんまり怖くない感じで聞く。

「……………」

質問を無視して玉藻は背中を叩き続けた。

「……………ふう」

答えそうにない玉藻に嘆息を吐き夜叉王丸は再び瞳を閉じ玉藻に背を向けた。

「……………ッ」

夜叉王丸の態度に玉藻は一瞬、捨てられた子犬のような表情になったが直ぐに尻尾で背中を叩き始めた。

『……………こういう場合は機嫌が直るのを待つしかないな』

『まあ聞かなくても様子から使い魔がやられて、俺に八つ当たりでもしているんだろう』

半分正解で半分は不正解の夜叉王丸。

そして外れた半分は自分に責任があるのを知らない夜叉王丸。

不機嫌な玉藻を無視し夜叉王丸は再び眠ろうとしたが肩を叩かれ眼を閉じて背中を向けたまま尋ねた。

「……………何だ？姫」

「……………」

しかし無言が返ってきた。

「……………はぁ」小さく息を吐き背中を丸める。

暫らくすると再び肩を叩かれた。

「……………」今度は瞳を開け視線を送ると

「……………ッ！！」

今にも泣きそうな顔で見下ろす玉藻と視線が合った。

「……………姫」

起き上がり頬に触れようと手を伸ばすと

「……………やっ」

身を引こうとする玉藻。

しかし、腕を掴まれ叶わなかった。

「どうした？そんなに泣きそうな顔で？」

「……………飛天なんか嫌いっ」

「……………」

「なによっ、月黄泉に煉獄の術なん……………て、教えて……………月黄泉ばかり構って……………わた、しなんて見向きもしないで……………う、うわああああん！？飛天の馬鹿……………」

嗚咽を上げ玉藻は途切れ途切れに言葉を紡ぎながら夜叉王丸を睨んだが終いには泣き出した。

「……………はぁ」

泣き出した玉藻の姿に些か呆れ果てながらも懐から手拭いを取り出し涙で濡れる頬を拭う。

「泣くなよ。仮にも九尾の狐だろ？」

「うるさいっ！？私だって恋する乙女だもん！？うわああああん……………」

慰めの言葉に更に声を張り上げ泣き叫ぶ玉藻。

「恋する乙女、ねえ」

男には理解不能の世界だと思つ夜叉王丸。

しかし、そんな事を言えば火に油を注ぐ結果になるのは分かり切つた事なのであえて言わず心の中に留める夜叉王丸。

「なによつ、何か言いなさいよつ!？」

何も言わずにしていると涙声で怒られた。

「……………んな事を言われてもな。どうしろと?」

「慰めてよ!？」

「……………はあ、我侂な姫君だ。……………まあ、そこも可愛いがな」

最後は聞かれないように小さく言つて玉藻を抱き上げた。

「……………ツ」突然の事で泣き止む玉藻。

「あーあ、涙で目元が真っ赤だぞ。そんな顔じゃ城に帰れないな」

涙で濡れた目元を舌で舐める夜叉王丸。

「ひ、飛天つ」突然の事で息を飲む玉藻。

「このまま行くと月黄泉に醜態と晒す事になるから少し温泉に行くぞ」

牛車から降りて抱き上げたまま茂みの中を進む夜叉王丸。

「まったく。あそこは誰にも教えてない隠しスポットなのに」軽い愚痴を零す夜叉王丸。

「誰にも？月黄泉にも教えてないの？」小さく尋ねる玉藻。

「ああ。俺と姫だけの秘密の場所だ」

「飛天と二人だけの場所！？」

ぱあっと顔を輝かせ尋ねる玉藻。

どうやら夜叉王丸との二人だけの秘密が何よりも嬉しいようだ。

「本当に飛天と二人だけなの？」

「ああ。俺と姫の二人だけだ」

玉藻の様子に苦笑しながら答える。

「やった！飛天と二人だけの場所だ！？」

少女のように瞳を輝かせると夜叉王丸の首に抱き付く玉藻。

「……………やれやれ。現金な姫様だ」

嘆息しながらも笑う夜叉王丸。

これから行く場所はたまたま見つけた温泉で月黄泉の隙を見つけに行く場所。

しかし、今の状況から考えれば直ぐに見つかってしまっただろう。

『まあそうならそうなら仕方ないか』

苦笑しながら早く早くと急かす玉藻を抱きながら夜叉王丸は茂みの中を歩み続けた。

第二十話：現金な姫君（後書き）

後一話で完結なので、もう少しお付き合い下さい!?!?

**最終話・ついに見つけた（前書き）**

長らくお待たせしました。ついに完結です。

## 最終話：ついに見つけた

「……………むっ」

牛車に揺られながら母上と飛天を乗せた牛車の後を追っていると不  
振な気配がした。

「どうかしたんですか？月黄泉様？」

水藻とお葛が妾の様子を感じ取り不安げに覗き込んできた。

「飛天と母上の気配が牛車から離れた」

「夜叉王丸様と大御所様が？」

「うむ。どうやら何処かに隠れる気じやな」瞬時に考えを巡らせる  
妾。

あの二人の事、何か良からぬ事を考えて要る筈。

ここは油断せずに行かねばならんな。

「あの、どうしますか？」

「決まっておる。二人の気配の後を追う」

間を入れずに答える。

「妾らも牛車から降りる」

草履を履いて牛車から降りる。

「あ、待って下さい!？」

二人も慌てて草履を履き降りてきた。

「行くぞ。油断するでないぞ」

十二単の裾が土で汚れたが知った事か。

今は飛天を母上から取り戻すのが先決じゃ。

気配のする方向へと足を進める妾は不安と期待で押し潰されそうだった。

飛天と母上は本当にこっちにいるのだろうか？

無事に飛天を母上の手から取り戻せるだろうか？

……嗚呼、飛天。どうか妾に力を与えてくれたもれ。

瞳を閉じ飛天に願う。

「月黄泉様？」二人が不安そうに見てきた。

「……何でもない。行くぞ」

二人に気付かれないように言うと茂みの中を押し進んで行く。

待っておれよ。飛天。

「……………はぁー。良い湯ー」

玉藻は白く濁った湯船に全身を浸かりながら腕を伸ばした。

「こんな気持ち良い湯は始めてよ！飛天」

玉藻は端っこで湯船に浸かりながら酒を呑む夜叉王丸を見た。

「……………そいつは良かった」

酒に酔ったのか湯船にのぼせたのか夜叉王丸は気の抜けた声だった。

「もう！こんなに良い女が傍に一人でお酒？」

「貸して。私が酌を上げてあげるから」

夜叉王丸に近づき酒が入った瓢箪を取り上げる。

「さぁ、どうぞ。飛天」空のお猪口に酒を注ぐ玉藻。

「……………」酒の入ったお猪口を一気に呑む夜叉王丸。

「良い呑みっぷりね。どうぞ」ご機嫌上々の様子で笑う玉藻。

夜叉王丸と二人だけの秘密の温泉がよほど嬉しいようだ。

「そんなに嬉しいのか？姫君」

「ええ。ここは私と貴方だけの秘密の場所。月黄泉達は知らないからね」

うふふふと笑いながら夜叉王丸に寄り掛かりお猪口を取り上げる玉藻。

「飛天つ。だーいすき！」

すりすりと夜叉王丸の胸板に顔を埋める玉藻。

「おいおい。さっきは大嫌いじゃなかったのか？」

「んっ、それはさっき。今は大好きなのっ」ぷうと頬を膨らませる玉藻。

「やれやれ。気紛れな姫君だな」

苦笑しながらも玉藻の顎を持ち上げ軽く口付けする。

「んふふふ」軽い口付けをされただけで嬉しそうに笑う玉藻。

「……………愛してるわ。飛天」

玉藻から夜叉王丸に口付けをしようとした所で

「……………やっと見つけたぞ。母上」

地を這うような声の方向に視線を向けると腕を組み全身を土で汚した月黄泉が凄まじい形相で玉藻を睨んでいた。

「……あら？何か用かしら？月黄泉」玉藻も負けじと月黄泉を睨んだ。

「何か用とはご冗談を……我が夫、飛天を取り戻し参ったのです」

「くすつ。この私から飛天を取り上げるとはいい度胸ね」

湯船から腕を出し狐火を作る玉藻。

「はっ、人の夫を誑かしたのに随分な言い訳ですね」

月黄泉も狐火を作り威嚇する。

「忠告です。飛天を妾に返し那須にお帰り下され。さすれば命はお助けしましょう」

「飛天を返して那須に帰れ？………舐められたものね」冷笑を浮かべる玉藻。

「どうしても飛天は返さない気ですか？」冷静な声で尋ねる月黄泉。

「当たり前よ。二千年も願い続けた恋を邪魔はさせないわ」

こちらも冷静に返答する玉藻。

「………ならば仕方ありませんね」

「ええ。そうね」

二人の間に冷風が漂い草木が騒ぎ出した。

「ひいっ」

水藻とお葛は抱き合って悲鳴を上げた。

「力づくでも飛天は取り返させてもらいます!?」狐火を放つ月黄泉。

「やってみなさいよ!小娘!？」

玉藻も向かってきた狐火に自分の狐火を放つ。

二つの炎がぶつかり大きな音と同時に辺りが輝いた。

「きゃっ!？」

光が治まり瞳を開けると月黄泉と温泉から上がり着物を着た玉藻が激しく狐火をぶつけ合っていた。

「飛天は渡さないわよ!」

「飛天は妾の夫です!」

凄まじい親子喧嘩に二人は背筋を凍らせながら逃げ腰になっていた。

「……やれやれ。見つとも無いとはこの事だ」

「「や、夜叉王丸様っ」」

背後を振り向くと着物を着て瓢箪を口にしながら苦笑する自分達の夫に当たる夜叉王丸がいた。

「大丈夫か？あの猪突猛進女に付き合わされて大変だっただろ？」

「「え？は、はっい」「」

つい本音を言ってしまう二人。

「正直な娘さん達だ」

笑いながら激しい親子喧嘩を繰り広げる月黄泉に玉藻をちらりと見て二人に振り返った。

「あの様子だとまだ掛かりそうだから俺達は城に帰るか？」

「「えっ？」「」

「お前さん達、朝から何も食べてないだろ？それにもう直ぐ夜になるから帰ろっぜ」

「で、でもお二方は……………」

水藻の質問に

「あの二人なら仲良く帰ってくるさ」

二人を見て小さく笑い夜叉王丸は水藻とお葛を両腕に抱えた。

「城まで飛ぶから掴まってるよ」

背中から漆黒の翼を出し飛び上がる夜叉王丸。

「ひゃっ」

「大丈夫だ。ゆっくり飛ぶから」

優しく言って夜叉王丸は城に向かって飛んで行った。

「あつ、飛天！？何処に行く！！」

激しい攻防をしていた親子は飛んで行く夜叉王丸を見て叫んだ。

「夜叉王丸様、お二方が何やら叫んでいますか……」

水藻が下を見て小さく言ったが

「気にするな。少しは親子仲良く反省するべきだ」

気にも留めずに夜叉王丸は城に向かって飛んだ。

「飛天！待て！！」

下からは二人が叫んで夜叉王丸の後を追いかけた。

『このまま城に帰れば後が怖いが、そしたら二人を連れて魔界に逃げれば良いよな？』

くすりと小さく笑って夜叉王丸は次なる逃亡計画を立てながら城へと急いだ。

最終話：ついに見つけた（後書き）

これで月黄泉の物語は完結です。いつか番外編を書くかも知れませんが、まだ未定です。

これまで付き合って下さった読者の皆様には感謝の極みです！

ありがとうございました！？

これからも夜叉王丸の物語は続きますが、他の物語も書くので飽きずにお付き合い下さい。

それでは良いお年と良いクリスマスをお送り下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0797c/>

---

女帝様はラブダーリン

2011年1月25日06時42分発行